
ONE PIECE Change the World

BBB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE P I E C E C h a n g e t h e W o r l d

【Nコード】

N1086P

【作者名】

B B B

【あらすじ】

ある日ONE P I E C Eの世界に転生してしまい何とか頑張つて生き抜く

残念な中学生の話

表現力が拙く文章も雑なのでそれでもOKな方は読んで下さい

第一話 転生？（前書き）

ご指摘を受けて書き直しました

何とか朝のチャイムが鳴る前に学校に着くことが出来た

うちの学校は読解力を付けるためといって8時～8時15分まで朝読書時間というものがある

オレはカバーを着けてマンガを持ってきている

1番後ろの席なので、姿勢を崩して読まない限り先生にバレる事は無い

周りの生徒はチクったりしたらクラスの皆から反感を買うので先生にチクったりしないので安心だ

1話を読み終わった所で丁度朝読書の時間が終わる

1時間目、2時間目、3時間目、4時間目とつまらない授業をまじめに受け

給食を食べ終わった後、屋上に向かう

屋上へ続く階段にはく立ち入り禁止の看板が置いてあるがスルーする

屋上への扉を開けると其処には青空が広がっている。

隅の日陰がオレの特等席だ鞆の中からマンガと枕を取り出し寝転がりながらマンガを読む

校庭では下級生達がサッカーをしながら大声で喚いているので五月蠅い

オレは耳に入ってくるおとが不快でイヤホンをして音楽を聴くことにした

オレの毎日はいつもこんなもん

友達も居るが表ではお互いの機嫌を取り合い

陰でコソコソとお互いの悪口を言い合う奴らばかりだ

1人なら誰にも構うことは無いし

ハッキリ言って1人の方が気が楽だ

「こんな世界消えればいいのに……」
叶うはずもない願いをつい口に出してしまう
それから深い眠りについた……

「……………んんんよく寝た！」

起きてみると既に太陽は真上に来て今が昼だという事を知らせている
「そろそろ教室に戻るか」などといいながら
屋上を出ようとすると

周りには屋上と呼ばれるものは無く、見たこともない木が鬱蒼と生
い茂っている

ここは何処？

って落ち着けオレは学校の屋上で寝てたんだろうがきつとこれは夢だ
そう思って夢？の中で眠ろうとして横になると

やけにこの地面や草に存在感がある
いつもの夢ならば固い物を握ってもフワフワした感じしかしないの
に何故だ？

一応お決まり的に顔をつねってみる

・・・うん痛い

どうやら本当にオレは起きていてこれは現実のようだ
N A N D E？

オレが持っていた鞆、ケータイ、財布、i p o d、マンガ、m y 枕
はあるが

オレが寝ていた屋上自体は無い

ま、まさか世界消えろとか言ったから？

それならこんなジャングルのような所は存在しないはずだ
もちろんそんな事があればオレごと消滅しているはず

「なーんだ、良かったー！」

って良くねえ！

「そ、そうだケータイで連絡を……」

案の定圏外、、、最悪

こんなジャングルみたいな所でどうしろと？

うわぁ鬱だぁ

「一応このあたりを散策してみるか」

ズルッ、
何かを引きずっているような音がする
足元を見てみると

ズボンが見事にブカブカになっている、ブレザーやシャツもしかり
もう最悪…………

何か知らない所に放り出されたり
いつの間にか縮んでいた

「何コレ？イジメ？」

そう言いながら落ち込んでいると
遠くから水が流れる音がする
よし！行ってみよう

此処に来てしまった手がかりが何かあるかも知れない
袖や裾を捲り上げたらなんとか動きやすくなったので音がする方へ
近づいて行く

近づいて行くととだんだん音が大きくなってきた

そして茂みを抜けると大きな川があった

水面に映った自分の姿を見ると…………

パッチリと大きい漆黒の目

鼻筋の通った鼻

そしてピンクの薄い唇

完全に前の姿とは違う

前は少しつり上がった細い目

鼻と口は普通と言う三枚目半くらいの容姿だったのだ

それが今はまだ子供で幼い感じはするが将来は二枚目確定だ

しかし、疑問が残る

ただ小さくなってこのジャングルに放り出された訳では無いという事だ。

ただ小さくなっているだけならば顔など変わるはずが無い

何故だ？いくら考えても答えなど出ない

だって、こんな事あるはずない・・・

はぁ・・・溜息も付きたくなるだろこんな状況

此処がどこか

わからない

どうして此処にいるのか

わからない

なぜ縮んでいるのか

わからない

こんなにも、わからない事だらけ

しかも手元にある物は、ジャングルで使えそうなのはほとんど無い。

とりあえずこの川に沿って歩いてみるか・・・

オレは小さくなった身体で無駄な物ばかり入っている鞆を持ち

川に沿って歩いて行く

どれくらい歩いただろうか

やっと前方の木々の隙間から光が見えてくると、なんか泣きそうになった（T？T）嗚呼ヨカッタァ

猛ダッシュで木々の間をすり抜けジャングルを抜ける

すると・・・

目の前には青一色
空と海の境目が分からないほど真っ青だ

しかし、オレの心はそれ以上にブルーだなぜなら
ジャングルを抜けてすぐに「海」これが意味する事は……………島と言
う事だ

せめて街が近くにあればいいのだが・・・

「一先ず島を一周してみるか」
少しの希望を持って島を一周することにした。
うん、こういうのはポジティブに行かなきゃな！

さっきから1時間くらい砂浜を歩いているが
全くと言っていいほど何も無い
しかし、かと言ってまた迷いたくないから森には入らない

そして何の収穫も無いまま
又さっきの川に戻ってきてしまった。
ずっと歩いていたので喉が渴いていた
なので、川の側に行って川の水を飲む

「プッハーッ 生き返ったあゝ」
喉が渴いてる時の水はなんでこんなに美味いんだろう！

ん？・・・・・・・・何か川の向こう岸にさっきは気付かなかつた古ぼけた箱がある

何か手がかりがあるかも知れないので、ズボンを捲くり上げ膝上くらいの深さの川に入る

一歩踏み出すと意外と石がツルツルで滑ってしまいそうだこけないように慎重に近づいていく

あと少しの所で石に足をとられて こけてしまった

「あと少しなのにマジ最悪・・・」

なんとか岸に辿りつくと、箱に近づく

よく見ると宝箱のようだ

怪しく思いながらも、今はこれしか手掛かりがないので恐る恐る開けてみると・・・

そこには、純白の色をしたリンゴのような果物があった

「何だコレ？」

手に取って見てみるが色以外特に変わった所が無い

さっきから歩きっぱなしで、腹減ったしちょっと齧ってみるか
カプッ

「不味っ！」

第一話 転生？（後書き）

何の実にしようか考えています
編集しまくってゴメンなさい m

（
）
m

第二話 悪魔の実？（前書き）

悪魔の実変更して申し訳ありませんM（　　）M
悪魔の実でいう海とは水の溜まっている場所を指すらしいです
なので川の水に手を入れても力が抜ける設定にしています

第二話 悪魔の実？

謎の純白の果実はこれでもか！というほど不味い

「不味、不味っ！！」

でも一旦口に入れてしまったので、吐き出したくない
我慢して飲み込む

「グ
ウ
ワ
ア
ア
ア
ア
ー
ー
ー」

吐いてもいいように川の側にしゃがみ込む

10分後
――

なんとか吐き気が治まったので

口直しに水をすくって飲むと水に手を入れた瞬間

急に体から力が抜けた

さつき変な果実を食ったから？

しかし、水から手を出すとまた体に力が入る。

「何で？ 水恐怖症にでもなった？」

また、水に少し手をつけると力が抜ける

あの怪しい果実を食べるまで川に入ってもなんともなかった

果実が入っていた箱をもう一度漁ってみる

しかし果実が一個しか入っていなかったのに見落とすはずが無い最後の悪あがきにひっくり返してみると・・・

パラツ

紙切れが一枚落ちてきた

地面に落ちた紙を拾ってみる

何かから千切った跡があり

木の木目が薄っすら付いているあたり底に引っ付いていたようだ

「何か書いてある・・・」

幸い日本語のようでした

しかし、かすれていて読みにくいがなんとか読む事ができた

――ナルナルの実――

● **超人系** パラミシア

・食べると自分が大好きになりナルシストになる。

・自分を何より大事にしているため、攻撃を受けるといつも以上にダメージを受けてしまう。

- ・性格が自己中心的になる。

- ・プライドが高くなる、
、
etc,
、
、
、

「何コレ？ナルナルの実？こんな名前した果実あったっけ？」

こんな感じに能力が身に付く果実一つしか思い浮かばないんだけど……」

一応確認のために紙を隅々まで確認する
すると左上の隅にこの紙が千切られる前に付いていたであろう
本の名前が書いてある

その名は・・・・・・「悪魔の実の図鑑」

「はあああああ!!?」

嘘だろ!?! そんな物が存在しているのか!?!
しかし、心当たりがありすぎる

1. 糞不味い

まあこれは、ほかの食べ物でもあり得る

2. 水に手をつけると力が抜けた

食べるまでは、なんとも無かったのに明らかに食べてから
こうなっている

認めたくは無いが此処はONE PIECEの世界のようだ
それならオレが縮んでいる事や顔が変化した事に辻褄が合う
そしたら、さっき食ったのは本物の悪魔の実
能力が記載されている通りならば、、、

最悪だ

唯ナルシストになって、泳げなくなるだけじゃねーか！
これと全く同じようなデブなら隣のクラス居たけど・・・
鬱だ死のう・・・

ま、まで死ぬには、まだ早い

そもそも、自分的にはナルシストになっているようには思えない
よし！

一回自分を殴ってみよう、紙にはいつもよりダメージを受けるとか
いてある

これが本当ならば自分はナルナルの実のナルシスト人間と言う事になる

自分の縮んだ身体を早々に痛めつけるのは気が引けるが
仕方がない、今はこれしか方法が無い

バコッ

痛い

しかし、いつもと痛みは変わらない

これでオレがカナヅチナルシスト人間では無い事が証明された

「やったー！！！！ナルシストになって堪るか！」

でも、紙に記載されている実と違うとすると

あの実は何なのだろうか？

ただの果実では無い事は確かだが・・・

ペラッ

何気なく裏を捲ってみると裏にも何か書いてある

これも悪魔の実のようだ
説明を読んでみる・・・

ーーーークウクウの実ーーーー

パラミシア
超人系

- ・空間操作能力が身に付く
(空間転移能力、空間破壊能力、空間創造能力)
- ・自分が生み出した空間の中の質量、気圧、温度、湿度を設定できる
- ・無空間を操ることができる
- ・亜・・・・・・・・

ここから先は消えていて読む事が出来なかった。

ここまで読んだ限りでも、えげつない能力だ。
ナルナルの実より断然こっちの方がいい

果たしてこの実がオレの食った実なのだろうか？

試してみるにしても能力の使い方がよく分からない
書いてある能力を片っ端から試してみるか？

まず、最初に書いてある空間操作能力のうちの空間転移能力を試して
みる事にした

「何の空間を移動させればいいんだろう？

そうだ、向こう岸に置いて来てしまった鞆をこっちへ持ってこよう」

今行ったら多分溺れて取りに戻れないし・・・

いや行けるのか？ルフィ海の中で力が入らなくても

鼻血でぶっ飛んで行ったサンジ連れ戻したり

クラークンを殴ったりしてたから

出来る事は出来るだろうが慣れていないオレは石に躓いて溺れてア
ウトだろう

なので今回は能力確認の為にやってみる

鞆の周りの空間と自分の足元の空間を指定して、頭の中で入れ替える
イメージをする。

すると、草の生えていた地面が鞆を置いていた地面と入れ替わり鞆
が足元に来た

これでオレが食った実が クウクウの実 である事が証明された。

なるほど、これは便利だ空間ごと移動するのが玉に瑕だが
自分を転移させる時はジャンプして、空気だけ入れ替えればいいだ
ろ・・・

後は、安全な場所と食料だ

多分安全な場所は空間創造能力で創れるだろうから後回しにして

まずは食料の確保だ

カナヅチなので魚は無理だ

能力を使えば余裕だが

細かい制御が出来ない為

間違って自分を水の中に転移させてしまったり自分自身が被害を被
る場合がある。

なので今日はジャングルに入って食料を探す事にする。

惨劇が起こるとは知らずに・・・

第二話 悪魔の実？（後書き）

今回も短い上に指摘を受け書き直して
ご迷惑お掛けして申し訳ありません

第三話 食料確保？（前書き）

今回も糞です

誰か文才くれないかな・・・

第三話 食料確保？

ジャングルに入って食料を探す事にしたのだが、迷わないように川沿いを歩いているが全く何にもない

「仕方無いもつと奥に進むか・・・」

そうして歩いていくと、とうとう川の水源にまで来てしまった。
もう日も暮れるし帰ろうかと思って振り返ると・・・

出たよ・・・化け物

其処には目を血走らせ涎をたらしながらこっちをみているトラが居た。

「ぎゃあああああ！」

虚しくもオレの声は誰にも届かない

ヤバイどうしよう

逃げる？ たぶん逃げ切れず喰われるのがオチだろう

死んだフリ？ フリじゃ済まない確実に死ぬ

このままじゃ、いずれにしろ死ぬ

クソッオレがログア系食ってたら良かったのに・・・
しかし今更悔やんでも後の祭りだ

そうだ！能力の説明の欄に書いてあった能力いずれかを使えばどう
にかなるかも知れない

ポケットに入れていた紙を取り出す

えーと・・・空間操作と空間創造、無空間操作

この場合どれが一番最適なんだろう？

つべこべ言っている暇は無い

命の確保が先決だ！

空間創造能力を使い、自分の周りに何も入って来ないようにイメー
ジする。

上手く出来たかは分からない

何せ初めて使うから

ココでトラが飛び掛かって来た

思わず身を屈める

・・・

しかし、いつまでたっても衝撃が来ることは無かった。
どうやら能力は成功していたようだ。

空間を創造しても目に見える変化が無いので成功したのか失敗した
のか分からないので困る

何はともあれ成功していて何よりだ。

トラはオレに一定以上近づけないようだ。

このまま興味が無くなって何処かに行くのを待つしかない

約一時間後――

いつまで待っても居なくならない

心なしか息が苦しくなってきた

そうか、何も入って来ないようにしたからか・・・

ヤバイ、このままだと窒息死する

ここから出ても死

ここに居ても死

どっちにしろ死亡フラグだ。

「よし！こうなったら奴をぶっ殺すしか無い」

だんだん思考が危なくなってくる

しかし、このままでもこうしてても仕方がない・・・

空間破壊能力

コントロールするまで使うまいと思っていたが、やるしかない！
これまで、能力に関しては大体出来たのでやってみよう

腕を振り上げ、力を籠める

丁度 白ひげや黒ひげが地震を起こすときの構えだ

ググッ

最大まで力を籠めた腕をトラに向かって振り下ろした

バキィ

空気じゃなく空間そのものに罅が入る

すると、トラが鳴き声を上げ吹っ飛んだ

「ギアアア・・・」

大木に当たりどうやら気を失ったようだ。

一時はどうなることかと思った・・・

もう日が暮れようとしている夜にジャングルを動き回るのは危険だ
丁度食料もあるし何とかなるだろう

さて、食料は手に入れたものの問題はとう調理するかだ

火など無いしかし生肉で食べる訳にもいかない

どうしたものか・・・

能力で何とか出来ないかとまた、紙を取り出しざっと確認する

「えっと、自分の生み出した空間の中を制御出来るっぽいな」

温度も調節出来るようなので温度を上げて加熱すれば食べる分には
大丈夫だろう

しかし殺生を好まない日本人に生まれてしまったので自分の手で殺すのは抵抗がある。

トラくん、君には悪いけど生きたまま焼き殺しちゃいます☆てへっ
自分でやってて思うけどコレキモイわ

早速トラの周り3 m四方くらいを指定して空間を創造し
その空間の中の温度を上げた

トラは暑さに飛び起きるも、逃げられる訳も無く焼死した。
指定された空間の中の草は水分が飛んで干からび
地面は水気を失い地割れを起す

10分程加熱し終わると
空間の指定を解除して近づこうとしたら未だ熱いのでしばらく放置
した。

熱く無くなるとトラに近づき思案する。

どうやってコイツから皮を剥ぎ肉を手に入れるかだ・・・

クソッ

ルフィは刃物何か持って無くてどうやって肉を取ってたんだ？

オレの能力がスパスパの実だったらこんなトラくらい一瞬でバラし
てやったのに・・・

ん？・・・そういえばクロコダイルや黄猿は、砂や光を固形化して
剣をつくってたよな

オレも出来るかも知れない

手の周辺にある空間をナイフの形になるようにイメージする。

そこから、ナイフ形の空間に質量を持たせ物質化させる。

すると透明なナイフが完成した。

質量を持っているためか光を屈折して実体が見える。

オレが切り取った空間は、また他の空間が穴埋めしたようでなんとも無いようだ

コレで、トラの皮膚に切り込みをいれようと刃をあてると

スパッ

刃をあてただけなのに、スッパリ肉ごと切れやがった・・・コワッこれは、一歩間違ったらオレが死ぬ・・・

十分注意しながら刃を入れてバラバラにして、巨大な葉っぱの上に盛り付ける。

そして、いきなり肉にがつく
だって、昼にあのクソ不味い悪魔の実しか食ってないから腹が減ってたんだもん

20分後――

食い終わったので、眠くなった・・・

なので、空気と光以外入れないようにした空間を創り出し
その中に入って眠りについた

第三話 食料確保? (後書き)

クソです

第四話 修行？（前書き）

今回もあまり面白くないです。ゴメンナサイ

第四話 修行？

起きると朝になっていた。

結構な時間眠っていたようだ。

創った空間を解除して外に出た。

今日は能力を使つての修行をしようと思う

せっかくONE P I E C Eの世界に來たのだから、強くなって世界を支配・・・

なんて事はしないけど、せめて自分の身を護れるようにはなりたい

最初は基本中の基本

肉体の強化だONE P I E C Eの世界では、オレがいた世界では出来ないような事をやってのけるので、たぶん鍛えれば出来るようになっていけるのだろう

早速巨大な空間を創り出しその中の重力を二倍に設定する。

中に入ると、急に身体が重くなった立てないと言うほどではないが踏ん張っていないと立ってられない

ヤバイ二倍でコレだと十倍とか死ぬな

悟空よく百倍とか耐えられたな・・・

ゼエゼエ・・・

腹筋や腕立て伏せをちよつとやっただけでこの有様だ
やはり身体が出来ていない子供の身体じゃ限界がある・・・
少し経つと身体が慣れてきたのか動けるようになってきた。

暫くは、二倍で慣らしてから能力の実験に取り掛かった。

空間転移、空間破壊、空間の物質化などの空間操作と空間創造は出来た。

空間転移に関して言えば、実際に行った場所にしか転移出来ないマンガの中で見たフーシャ村に転移しようとしたが出来なかったしかし、クウクウの実には、まだまだ能力があるようだ。

その中のひとつ無空間については全くのノータッチだったので、周りに被害が及ばないこの空間の中でやる事にした。

無空間をイメージしようとするも無空間など見たこともないのでイメージ出来ない

無理矢理しようとする黒いモヤモヤが出てくるだけだ。

どうしよう・・・

モヤモヤが出ている手を下に降ろすとその手が通った空間がパツクリ割れて

何も無い黒い空間が覗いている。

「コレが無空間？」

手を無空間に入れると手が見えなくなり手の感覚が無くなる
ビックリして手を引っかくとまた手が現れ感覚が戻る

無空間に興味本位で入ると多分戻ってこれなくなる
おお怖い怖い・・・

これで一通り能力の確認が出来た。

後は能力の使い方次第でいくらでも強くなる・・・と思う

そろそろ食事をしたくなったので、空間を解除して
ジャングルに戻る

ジャングルの中を暫く歩き回り

開けた場所に着いた

そこには、昨日のトラとは比べ物にならないほど
巨大な動物達が居た。

昨日のトラが腹減っていたのは、この島の生態系の底辺だったから
に違いない

あんな雑魚を倒したくらいで調子に乗ったオレが恥ずかしい・・・
すると、その中の一匹がオレの臭いを嗅ぎつけたのかこっちに近づ
いてきた

ヤバイ オレ 死ぬ

多分コイツ一匹ならいけるかも知れないけどアイツ等全員を相手に
するのはムリだ

よし！ここは逃げよう！うん、それがいい！

自分の周りの空間と昨日居た砂浜を指定する。

チェンジ
「転移」

なぜ、叫んだのかって？それはオレにはルフィみたいに技名が欲しかったからだ特に深い意味は無い

シュンツ

指定した場所二つを入れ替えた。

何とか逃げ切ったオレは今砂浜で寝そべっている
腹減ったけど

アイツ等全員相手にするよりマシだ

ん？・・・何かが遠くから近づいて来ている。

船か？よっしゃあ！助けてもらえるぞ

そんな期待は早くも裏切られた。

なぜならその船の帆に描いてあるマークが海賊旗だったからだ。

クソツついてねー今日は厄日か？

よく見るとその海賊船はボロボロだった

何かから逃げて来たのか？

海王類とかだったらヤベエこっちまで巻き添え喰らっちゃもう
しかし、海王類とは違うようだ

あれは何だ？

鯨？ いや違うアレも海賊船だ鯨の海賊船と言えば一つしか無い

” 白ひげ海賊団 ” 海賊王ロジャーと渡り合った伝説の海賊白ひげエドワード・ニューゲートが率いる

巨大海賊団だ

しかし、船体が黒いのでモビー・ディック号ではないようだ。

そんな白ひげ海賊団に追われているアイツ等は何をしたんだ？

すると、追われている方の海賊船が島に上陸して来た
その船から出てきた奴らの中の数人は負傷しているようだ
多分大砲か何かにやられたんだろう

船長らしき人物が何か叫んでいる。

その集団がこっちへ向かって来た。

そして、オレの目の前に来ると立ち止まったと思ったら

???? 「オイ小僧オ！ 命が惜しければ食料を差し出せそうすれば命だけは助けてやる」

船長らしき人物がオレに向かって言い放った

「オレも持ってねえよ！ こっちが欲しいくらいだ」

そう言う

癪に障ったようで

「ウルセェー！！ つべこべ言わずにその荷物よこせえ！」
と言いな

襲い掛かって来た

こうなれば仕方が無いこっちも正当防衛だ
構えて力を溜め放つ

バキベキィ

前よりも罅が大きくなったそれは海賊達全員を吹き飛ばした

「ちよつとやりすぎたかな・・・」

修行の成果か前より強くなっているようだ

しかし、何人かは立ち上がってきた

??? 「何しやがった! このガキィ俺様を誰かわかってんのか? 懸賞金6000万の大海賊青ひげ様だぞお!」

確かに剃り損ねたのか口元には青ひげが広がっている

「ふゝんだから何?」

オレの言葉で完全にプツンしたようだ

「いちいち癪に障る小僧だぶつ殺してやる!」

砂煙を上げながらこっちに来る

予想より素早い

懸賞金が6000万あるのだから侮ってはいけない

しかし、能力者じゃなければこの程度ならば倒せるだろう

だが、動いている相手の周りの空間を指定するのは容易ではない

邪魔くせえ

もう面倒臭いので空間破壊の能力を使う

両腕を使って広範囲に空間を破壊する

バキィ

ベキィ

二度吹っ飛ばされた青ひげのオッサンは砂浜に刺さって気絶している
口ほどにも無いとはこういう事だろうか

こいつ等ほっといたら何をしでかすか分かったもんじゃないので
纏めて脱出不可の空間に入れておいた

初めての戦闘はこうして幕を閉じた

第四話 修行？（後書き）

戦闘シーン難しいですね

第五話 決意？（前書き）

なかなか残念です

第五話 決意？

オレが青ひげ海賊団一（爆）を纏めて倒した後
鯨のような海賊船一（恐らく白ひげ海賊団）も島に停泊し1人だけ
上陸してこっちに向かって来た

それは、ONE PIECEの原作で見た事があるような格好をし
ていた

紫の上着

胸から腹にかけての刺青

頭のとっぺんにしか生えていない金髪

極めつけは、死んだ魚のような半開きの目

そう、白ひげ海賊団1番隊 隊長通称”不死鳥マルコ”と呼ばれる
人物に酷似していた
まさか・・・アイツが白ひげの側を離れる訳がない
その人物はオレに近づくと口を開いた

「お前誰だよい」と聞いてくるので

「ただの漂流者です」と答えた。異世界から来ましたなんて言ったら頭がおかしいと思われるかバカにしていると思われるで怒られるのがオチだ

今度は、コイツが誰か知るために

「貴方こそ誰ですか？」

と聞いた

その人物はこう答えた

「俺は白ひげ海賊団 1 番隊 隊長のマルコだよいお前の名前は何ていうんだよい」

と聞いてきて答えようとするが思い出せない
他の人の名前はハッキリ覚えているのに自分の名前だけ思い出せない何故だ？

ずっと考えているのも不自然なので、家のペットの名前にした

「えーと・・・オレの名前はエンマです」

何故家のペットがこんな名前なのかというと

初めて家にやって来たとき顔がブサイクで小さい頃に見た絵本の中の閻魔大王にそっくりだったのでその名前を付けたのだった我ながらダサイネーミングセンスだ

「じゃあエンマひとつ聞くがこいつ等はお前がやったのかよい」

マルコがさっきやつつけた海賊達を見ながらそう言ったので

「ああ そのオッサン達はオレに襲いかかって来たので少し制裁を加えただけです。貴方こそ何でこんな

雑魚を追い掛けて来たんですか？」

「こいつ等が俺たちの領海^{シマ}を荒らしたからだよい、そしたらこいつ等が逃げ出すんでここまで追いかけてきたんだよい」

なるほどねー愚かにも白ひげの領海^{シマ}に手を出して追い掛けられてた訳ね・・同情の余地無しだわ

「じゃあこのオッサン達あげましょうか？」

「いらねえよい、こいつ等は此処に置いていく」

実質の死刑宣告だな

この島の猛獣達の餌になって終わりだな、うんご愁傷様

「船はどうするんですか？放っておくとまたこいつ等逃げ出しますよ」

多分こいつ等懲りずにまた何かやらかすと思う

「そうだな、船を沈めていくか」

「ちょっと待ってこいつ等の船はオレが沈めていいですか？」

「何でだよい」

不思議に思ったのかマルコが聞いてくる

「こいつ等の宝を奪おうと思って何をするにも金って必要でしょ」
と言ってオレは船に乗り込んだ

中に入ってみると中は悲惨な状況だった甲板は大穴が開き、食料庫
と思われる部屋は丸ごと潰されていた
だからあのオッサン達食料をよこせと言ってきたのか
かれこれ30分ほど船の中を探し回り船の宝をほとんど探し奪った
奪った宝は空間歪曲して異常なほど広くした鞆の中に入れた

よし後は・・・船を沈没させるだけ
能力者である事がバレると色々厄介なのでココは能力を使わずに且
つ巻き込まれて溺れないように船を沈没させなければならない

辺りを見回すと結構デカイマツチのようなものがあつた多分大砲を
発射するために使うのだろう
よし！コイツで放火しよう
前の世界じゃ逮捕されるだろうがコツチの世界じゃ関係ねえ

箱の側面についているヤスリ状の摩擦面に擦り付ける

ボオオツ

火を船に燃え移らせると全速力で船を脱出してマルコの側に戻った
船は木で出来ていたのですねに燃えて沈没した

なかなか清々しい光景だ

「これでいいんですよね」

「これでこの島に用は無くなったよいい俺達はオヤジの所に戻るが、お前も一緒にくるか？」

「いやオレはもうちょっとこの島で修行したいので今は遠慮しておきます、出来れば2年後に迎えに来て下さい」

「分かったよいい 2年後に迎えにくるよいい だけど、こいつ等はどうするんだよいい」

確かにこいつ等は厄介だがオレのパシリくらいにはなるだろう
こいつ等が纏めてかかって来ても倒せるし寝るときはこいつ等を能力で閉じ込めておけばいいだろう

「こいつ等はこの島に置いて行ってもらって構いません。こんな奴等でも役に立つでしょうし襲いかかって来ても返り討ちに出来るんです大丈夫です」

「そうかよいい、じゃあ2年後に会おうよいい」
と言ってマルコが自分の船に向かっていく

「あ……そういえば聞き忘れた事があった」

それは今が原作開始何年前もしくは何年後かだ
結構離れてしまったが大声を出せば届くだろう

「オーイ！マルコさーんゴールド・ロジャーは生きてますー死んで
ますー？」

「ロジャーなら14年前に死んだだろうがよーい」

えーとロジャーが死んだのが原作開始22年前だからルフィは今9
歳か

大体の事はもう終わってるな

今原作8年前だからトムさんが死んだのとナミがアーロン一味に入
った頃か！

だとするとオレはルフィとそんなに年齢トシ変わらないな

よし！傍観者になって原作を傍観してやる

そのためにある程度強くなっておかなくちゃな

「ありがとーございましたーじゃあまたー」

こうしてオレはこれから2年間オッサン達との無人島生活が始まった

第五話 決意？（後書き）

読んでくれた人ありがとうございました

第六話 ヒノモト? (前書き)

ちよつとルフィたちが新世界入ってから思い直したんですけど、ガチでワノ国が出てきそうなので国名を変えます
申し訳ないっす

第六話 ヒノモト？

2年後――

無人島生活もようやく終わりを告げようとしていた

今のオレは2年前より背も伸び筋肉も付き、能力も使いこなせるようになった

無人島生活最初の頃はオッサン達は反抗していたが何度も倒されて今や従順な下僕だ

この島の動物達も最初こそは勝てなかったが修行の結果オレはこの島の生態系の頂点に君臨していた

なので今は食料には苦労していない

こんな島でも住めば都しかしこの世界に来てまで普通の生活をしようとは思わない

オレには原作を傍観するという使命がある！

オッサン達はこの島に残るそうだとオレの修行の相手をしてもらっていたから

白ひげ海賊団に追われていた頃とは比べ物にならないくらい強くなっている

この島の動物も倒せるようになり、今だったら億越えとはいかなくてもかなりの金額になるだろう

それなのにこの島に残るって事はよっぽどこの島が気に入ったのだろう

沖の方に黒い船が見えてきたやっとな来たようだ

内心忘れているかと思ったが忘れていなかったようだ

船はどんどん近づいて来て着岸した

そして2年前と同じようにマルコだけが降りてきて近づいてくる

「約束どうり迎えにきてやったよい」

「ありがとうございます正直来ないかと思ってましたよ」

「お前の事オヤジに話したら一度会っておきたいって言うからオヤジと会わせるために迎えに来たんだよい」

そういう事ねゝあの大海賊白ひげ様に連れて来いっていわれるとはなかなか嬉しいね

一度会っておいて顔見知りになつといたほうが徳だな うん

「オレも大海賊白ひげに会ってみたかったのでいいですよ」

「そうと決まったらさっさと行こうよい、でもアイツ等どうするんだよい」

マルコが指を指した方に目を向けると

オッサン達が大号泣していた

「アニキゝ今生の別れとは言わねえでまた会いにきてくれよゝ」

「アニキゝ行かないでゝ」

「今までありがとうアニキゝ」

などなどオッサン達が口々に別れの言葉を言っていた

うん流石オレの下僕達だ調教した甲斐があったよ

「オレのために2年間付き合ってもらって悪かったなこれから自分達のために生きろお前達の人生だ！

この島で暮らしていくも良し、この島を出て行くも良しお前達自身が決めて自分の思うまま自由に生きろ

またどこかで会えるといいな!」

と言葉を残して去って行く

「本当にこれでいいのかよい」

「はい、この島に残っても何にもなりませんし、あいつ等はオレが調教したのでもう悪さはしないと思います」

「そうかよい、じゃあ出航するよい!」

マルコと一緒に船に乗り込む

オッサン達が船の側まで来て手を振っている

なのでオレも手を振って

「じゃあなゝ野郎共ゝ」

と叫ぶと帆が揚がり船が出航した

船の中には結構な人数がいて新入りのオレにも優しくしてくれたのですぐ馴染む事が出来た

出航して2日後何処に行くのかも聞いていなかったなのでマルコに聞いてみる事にした

「マルコさんこの船は何処に向かっているんですか?」

「ああ、そういえば言っけなかったなこれからワノ国と昔から交流のあるヒノモトってところに行くんだよいオヤジと待ち合わせしてるからな」

ヒノモト…か原作ではか出てきてないな

自分の原作知識が通用しないのは不安だが未だ原作に出てきてないので少し楽しみだったりする

「おっ見えてきたよい！」

確かに前方に島のような黒い点が見える

ん？・・・待てよワノ国と交流あるってワノ国新世界になかったっけ？魚人島を通ってないって事は此処は新世界か！

そーいや白ひげのナワバリも新世界だったな

だとするとあのオッサン達懸賞金6000万ごときでよく新世界に來れたな・・・不思議！

そんな事を思っているうちに島はどんどん近づいて

港が見えてきた遠くから見ると小さいが近くで見ると結構でかい

よく大河ドラマなんかで見る江戸時代の街にそっくりでまるでタイムスリップしてしまったかのようで

そこに居る人達も時代劇のような格好をしていた

奥の方には天守閣のようなところや城下町のようなところもある発達しているのか発達していないのかよく分からない国だ

港に着くと真っ先にオレが船から降りていった

仕方無いじゃん船の中って意外と退屈なんだよ大体の事は初日に聞き終わっちゃったし船は揺れてオチオチ寝てられないし：地上が恋しくなってもいいじゃないか人間だもの
と言ってはみるけど本当は別に用事がある

それは、服だいくら身体が2年間で成長していても元の身長には到底及ばない上に2年間の修行や猛獣達との闘いであちこちに破れや穴があるのでさっさと新しい服に取り替えたいのだ
一応マルコに聞いてから行こうかな
まだ船の上にいるマルコに向かって叫ぶ

「マルコさくん買い物に行っていていいですか？」

「いいけどよい、金はあるのかよい金がなければ俺が奢ってやるけどよい」

「金ならあるので心配要りません大丈夫です」

「じゃあ気をつけろよい」

「はいじゃあ行ってきますよ」
そう言って城下町の方へ駆けていった

城下町には色々な物が売ってあった

食品や焼き物などを売っていたり刀を売っている店もあった後で行ってみよう

一通り見たところで呉服屋があった

他に服屋らしき店は無かったのでここで買うしかないか
和服なんか着たことないけど

中に入ると和服はもちろん小物や布まで売ってあった

何かいいのなかなくと思って見回していたら店員っぽいおばさんが声をかけてきた

「僕、何処から来たの？」

面倒なので適当に流す

「どこかの島から来ました何処の島かはわかりません」

「そう……何か御用？」

「あっそうだ身体のサイズに合う服を下さい」

「着物ね、ちょっと奥の方に来て採寸するから」

そう言われたのでおばさんに連いて奥の試着室に入った

おばさんは手際よく服を脱がせ腕や足の長さを測る

すべてを採寸し終わると試着室から出て行き身体のサイズに合う服を大量に持ってきた

「これが身体のサイズに合う服よこの中から選んで」

少し漁ってみるとサイズは合うものの蜻蛉柄や蛙柄など子供っぽくダサいものばかりだった

かと言ってダサいので嫌と言える訳でもない

だって日本人だもん

後、他に服売ってる店ないし

クソッここは何か都合をつけて少しサイズが合わなくても気に入った物の方がいい

「あのく僕まだ子供なんでサイズピッタリの服買うとすぐに着れなくなると思うんで少し大きめのを買いたいんですけど・・・」

「それもそうねじゃあ自分で気に入ったのを選んで」

おし！ナイスおばちゃん伊達に服屋やってないね

オレは持っていた破れた服を捨て浴衣のような簡単な着物を貸してもらい試着室を出て店内を見て回るが

いい柄があっても大きすぎたり小さすぎたりしてなかなかいいのが無い

仕方無い、着る物もないし無難な物を買って他の国なんかでまた買うか・・・

青い無地の着物を手にとってこれを買おうとおばさんの方をみるとおばさんの後ろの壁に掛かっている着物に目を引かれた

黒い生地に白い雲の模様が描いてある大きさも少し大きいくらいで丁度よかった

オレは持っていた着物を元の場所に戻しおばさんの元に駆け寄って

「おばさんあの後ろに掛かっている服はダメなんですか？」

「ああアレねアレは一点物だからとても高いのよ」

そういう事かゝヤバイなオレの持つてる宝でたりるかな……
まあ一応聞いてみるか

「このくらいあれば足りませんか？」

そう言つて鞆の中に入っていた宝をすべて取り出しレジに並べる
するとおばさんは吃驚してオレに聞いてきた

「僕、この宝どうしたの？」

「その辺に落ちてました」

どうせオレが海賊を倒して奪つたつて言つても信じてもらえないだ
ろう

少なくともその辺の子供が海賊を倒したと言つてきてらオレは信じ
ない戯言だと思ふだろう

なので適当な事言つとけばいいだろ

「そう……じゃあこの着物の代金はこれくらいね」

そう言つて宝の8分の1くらいを取つていた
もつとするかと思つていたので意外だったこれなら替えの服も買え
るな

この後替えの服を2、3着買つて

店の人に着付けを教えて貰つて店を後にした

第六話 ヒノモト？（後書き）

早くもネタ切れです

第七話 大業物？（前書き）

適当に書き過ぎてしまったので
誤字脱字や意見などございましたら言ってください

第七話 大業物？

今、呉服屋を出てから城下町を猛ダッシュしている
さつきまで、ボロボロになった靴を捨て下駄を買ったり喉が渴いた
ので飲み物を買ったりしていたのだが
飲み物を買った店の店主が腰に差していた刀を見て武器屋に寄ろう
と思っていた事を思い出したのだ

なので今オレは記憶を頼りに武器屋に向かっている
一回通ったことがあるので空間転移をつかえば一発だがなるべく能
力を見られたくないので使わない

つとここで武器屋の前に着いた
さつきは流して見ていたがこの武器屋結構でかい

店の中に入ろうとドアを開けるとチリンチリンと音がした
店に入ると刀や銃器などが所狭しと並んでいて奥にカウンターがあ
り、そこにいかにも頑固そうなオヤジが座っていた

入ってきて何も言われなかったの
そのまま店内を見て回る

この店の中は静かでなんとなく

こっちまで黙ってしまうくらいの威圧感があった

何故かはわからないが武器から発せられているようだ

まるでオレを品定めするかのように……

オレはその威圧感が最も強く感じられる

刀売り場のコーナーに向かった

刀売り場には大樽に大雑把に挿されている刀がたくさんあった
壁に掛かっている刀も数本あった

その全てがとても良い刀だという事はド素人のオレでもわかった
多分だがそのほとんどが業物や名刀であるに違いない

全部見ようと一本ずつ取り出していくとそれら全てが埃ひとつ付い
てなくよく整備されていた

次の樽に移ろうとすると一番奥の樽が目に入った

何かに引き寄せられるかの如くその樽に近づく

そしてその樽に挿さっていた一本を引き抜いた

その刀は日本刀のような形をしていた

鞘、柄、鐔のどれもが深い闇のような黒一色だった

柄頭の部分にこれまた黒い鎖が巻き付いていた

持ってみると想像していたより重くなく扱い易そうだった

おい誰だ”天鎖〇月”とか言った奴
確かにアレに似ちゃーいるが鰐は兎じゃないし、鎖も途中で千切れ
てないぞ

まあとにかくカウンターに持って行って値段を聞こう
聞かずに「コレ下さい」って言って金が足りなかったら話にならな
いからな

そう思って刀を持ってカウンターへ向かった

そしてオヤジに近づき

「すみません：コレいくらですか？」

「・・・その刀は売れん・・・」

「何ですか？何か理由があるんですか？」

じゃあそんな物売り場に置くなよ：と思いながら尋ねる
するとオヤジはその刀について語りだした

「・・・その刀は俗に言う妖刀でな、何人もその刀の所有者がその

刀自身によって殺されてきた」

「その刀自身に・・・？」

鬼徹一派の妖刀は持ち主が無残な死を遂げるだったが、刀自身が持ち主を殺す？

「どうやってですか？」

「・・・何も刀自身が動いて殺す訳じゃない、ある者は弾かれたこの刀に急所を貫かれ、またある者は刀の手入れの最中に手が滑って身体を切り刻まれ、その他この刀は自分に相応しくない所有者を悉く切り殺してきた」

おおく怖いねえ・・・ってオレそんな死に方するの嫌だよ

「しかし、最初の所有者の暗殺者だけはこの刀を屈服させ手足のようになにに操り、この刀によっていかなる時も護られてきたと言う逸話もある」

って逸話かよ！それが本当だとしても、その刀に殺されなかったのが1人だけって事は持った奴はほぼ死亡決定じゃねえか
てかそれで持とうとする奴いるのか？そしたらそいつはバカだ救いようのないバカだとオレは思う

「じゃ、じゃあ仕方ありませんね！諦めて他のにします！」

「・・・待て・・・」

「ハイイ！なんでござんしょ？」

何故か嫌な予感して声が裏返ってしまった

「・・・この刀は主と認めた者の身体は斬れないらしい・・・試してみるか？」

此処は全力でご遠慮申し上げたいのだが、無駄にオヤジが期待を籠めた目で見て来るのでどうにも断れない
クソッ何故オレは頼まれたら断れない日本人に生まれてしまったんだ

「・・・どうする？・・・怖いのか？」

このクソオヤジィ！見てろよ！ああ やってやんよ！オレやってやんよ！

ヤバイ病んでるな・・・どこかの赤い帽子を被っている地味な主人公の真似をしてしまった

震える手を必死に堪えてカウンターに置いてある刀に手を伸ばす
怖エエー！かと言ってそれをこのオヤジにそれを知られるのは
ちよつとムカつくな

覚悟を決め刀を鞘から引き抜く

スウツと音も無く刀身が姿を現す

刀身も漆黒で黒光りしていた

光に翳すと光は刀に吸い込まれかのように光が反射しない何もかもが不気味さを醸し出していた

刃は鋭く人などスッパリ斬れてしまいそうだ

これじゃあゾロみたいに刀を上 to 投げ飛ばすなんて事怖くて出来ないわ

腕一本取られるかもしれないんだぞ！

ここは・・・髪の毛だな人体に影響ないし

何より俺の髪は2年の無人島生活で髪がとても長くなっているのだからうっとおしいのだ

だからついでに髪を切ってしまうおう

軽い気持ちだと刀を見ても何の恐怖も感じない、人間って不思議だね

頭を前に倒し前髪を垂らす

そして前髪に向かって刃を振りぬいた

フワツツと髪を靡かせただけで髪は一本も切れていない

見掛け倒しでなまくら刀か？コレ

髪を固定してなかったからか？片手で髪を引っ張り固定する
そして、もう片方の手で刀を持ち髪に向かって刀を振るう

刀は固定された髪を通過する事が出来ず髪を軋ませただけだった
クッソク地味にイテエ

固定していたので髪を引っ張るだけに終わったなまくら刀のせいで
髪が何本か抜けた

将来禿げたらどうしてくれるんじゃない！このポンコツ刀
こうなったらオヤジに文句言ってやる！

「すいませくんこのポンコツ刀斬れないんですけど不良品じゃない
っすかね？」

「・・・そんな筈あるか！一回周りの物を斬ってみろ」

チッ・・・癪だが言われた通りにやってみるか・・・

刀を利き手である右手に持ち替え
近くに在った試し斬り用の巻藁に向かって軽めに振ってみる

どうせ斬れないだろうと思ったそれは巻藁を容易く切り裂いた

・・・
ん？

ちょっと待てさっきは全くといっていい程斬れなかったのに何故？
ま・さ・か・？あのお伽話が本当だっていうのかよ
笑わせんな！現実こんな事があってたまるか！・・・と言いたい
所だがオレはそれ以上にありえない体験をしているので無いとは言
い切れない

だとすると…オレは主人と認められたって事ですかね？
オヤジの方を見ると何故か納得したような顔をしていた

「やはりな・・・お前がコレを持って来た時から不思議に思ってい
たがそういう事か・・・」

「そういう事ってどういう事ですか？」

「・・・刀がお前を選んだと言う事だ今まで誰も手懐けられなかつ
たこいつをな・・・」

刀を選んだ？刀ってそんな事出来るの？何かハリー・ポッターの杖
みたいだな……

って事はこの刀を買わなくちゃいけないのかな？金足りるか分かん
ないんだけど

「ところでこの刀っていくらなんですか？」

「・・・この刀は、大業物 乱刃小丁字 黒刀【月蝕】時価だが3
000万ベリーはくだらない」

うそ〜ん多分そんなに無いよ
じゃあ仕方無いね！よし、髪切って帰ろ〜っと

「あっ！オレそんなに金持っていないんで帰りま〜すお手数掛けてス
イマセンでした〜」

うん、なかなかの棒読みで言ってやったぜ

「・・・それなら心配いらんタダでくれてやる どうせ売れ残りだ
しな」

マジで！ルフィの最初の懸賞金と一緒にだよ！オッサンどこの大富豪だ
って言うかこの世界での3000万がどのくらいか分かんけど

「じゃあ遠慮なく貰って行きます」

「・・・そうか大事にしてやってくれよ」

「はい！どうせ恐竜が踏んでも一ミリも曲がらないんだから大丈夫
でしょう…多分」

オヤジから【月蝕】を受け取り「ありがとうございやした〜」と言
って店を後にした

エンマが出て行った後オヤジは1人で他の刀に向かって呟いた

「・・・まさかアイツが売れるとはな・・・あの子が何を仕出かすか見ものだ・・・」

そんな事は露知らずエンマは髪結い床屋で店主と揉めていた

「だ〜か〜ら鬘は嫌だっつってんでしょうが！」

何時になく声を荒げてしまうのには理由がある

20分前――

オレは床屋を探して城下町を探索していたら髪結い床屋を発見
中に入っただけかみを短めに切ってくれと頼むと……

「ウチは髷しか結わねえぞ！」とキレられた
しかし此処しか髪を切る所が無かったので

「短く切れないだけじゃないですか？」と言って挑発して切らせよ
うとしたら状況が悪化今に至るという訳だ

「いくら言われてもウチは髷しか結わねえから嫌だったら他の店
に行け！」

こっちだって行きたいのは山々さ！　だけど此処しかないんだもん
仕方無いなここはオレが大人になって妥協してやるか

「じゃあ、おじさん！こうしましょう この髪を後ろに結って下さい
それなら結った事になるしお互いに納得するでしょ？」

「うう……それなら良からう」

そう説き伏せるとおじさんは観念したのか髪をおとなしく結いだした

更に30分後――

髪が邪魔にならなくなったオレは白ひげ海賊団の元に戻っていった

第七話 大業物？（後書き）

連載がこんなに辛いとはおもいませんでした（涙）

第八話 決闘？（前書き）

遅れてすみません
見てくれている人少ないと思うけどね（笑）

第八話 決闘？

オレが白ひげ海賊団の元へ戻ると

黒い鯨の船の横に黒い船よりも大きい白い鯨を象った船が停泊していた

そう『モビーディック号』と呼ばれる白ひげ海賊団の本船だ

という事は……白ひげ エドワード・ニューゲートが乗ってるって事か

ヤベエ今更ながら緊張してきた！隊長達とかも居るのかな？

嫌だな〜ココは逃げちゃおっかな〜

いや、間違いなく見つかるな…空間転移は行った事ある所にしか行けないし

街の中に逃げ込んでも数分と持たず見つかるだろう…どうしたもんか

などと考え事をしていると

「おい！エンマ帰って来てたのかよい！探しに行こうかと思ったぞ」

見つかってしまった

いや見つけれなくても問題ないんだけど

そう言ってマルコが飛び降りて近づいて来た

「遅かったじゃねえかよい 心配したぞ」

「すいません服とか刀とか買ってたら遅くなっちゃって」

「まあそんな事よりオヤジがお待ちかねだよ」

マジで！そんなにオレなんかに会いたいの？オレは取るに足りない
雑魚なのに：

うう：胃が痛くなってきた

「それじゃあ行くよい」

そう言われると断り辛いので大人しくマルコに連れられてモビー・
ディック号の甲板に繋がっている階段を上って行った

甲板に上がると原作を実写化したかのような人達が居た
しかし、元の世界じゃ考えられないくらいデカイ奴も居るが・・・
しかも16部隊隊長15人揃ってやがる！確か2番隊の隊長は欠番
だったっけ

改めて見ると凄いメンバーだ

1番隊 隊長 ”不死鳥” マルコ
言わずと知れたN.O.2 悪魔の実の能力者だね

3番隊 隊長 ”ダイヤモンド” ジョズ
アレだなドフラミンゴに操られた上に青キジからやられてた奴だな
そして悪魔の実の能力者だったな

4番隊 隊長 サッチ
黒ひげに殺されちゃった奴だ
それ以外特になし

5番隊 隊長 花剣のビスタ
二刀流の剣士で”鷹の目”と互角に斬り合ってた奴だ
実物も髭凄いな

6番隊 隊長 ブラメンコ
えーっと確かポケットからデカイハンマーを出して戦う奴だ
本人もデカいが……

7番隊 隊長 ラクヨウ
ドレッドヘアーのオッサン
パクマン的なハンマーを使ってた奴

8番隊 隊長 ナミユール
胸に8のマーク
魚人？

9番隊 隊長 ブレンハイム
弁髪の大男（白ひげよりデカイ）

10番隊 隊長 クリエル
メガネで少しクラッチメン・アプーに似ている
2つのバズーカを背負っている

11番隊 隊長 キングビュー
ボブヘアーで両腕に何か付けている

12番隊 隊長 ハルタ
隊長の中で1番背が低い
貴族風の服を着ている

13番隊 隊長 ”水牛” アトモス
ドフラミンゴに操られて部下を攻撃していた

14番隊 隊長 スピード・ジル
悪いが顔と名前があっていない
豚鼻でスピードがあるようには見えない

15番隊 隊長 フォッサ
葉巻を銜えた中年（禿げ）
剣に炎を纏わせて戦っていた

16番隊 隊長 イゾウ
歌舞伎の女形のような風貌をしている
2丁拳銃使い

そして隊長達を束ねる船長
”白ひげ”エドワード・ニューゲート
体中傷だらけで怖いあとデカイ
そして何よりどうやったらそんな形になるの？と聞きたくなるトレ
ードマークの三日月みたいな口髭

目が合った瞬間身体が硬直してしまった
別に覇王色の覇気をあてられた訳じゃないのに・・・格の違いとい
うか生物そのものとしての性能の違いを思い知らされたような気が
した

そして白ひげが口を開く

「マルコ、その小僧がお前の言ってた奴か？」

「そうだよ、エンマって名前だそうだ」

「おい！小僧そんな所に突っ立ってねえでこっちへ来い」

この距離で身体が震えてるのに近づくだと？実質の死刑宣告じゃねえか！

「オヤジが呼びだよ、行くぞ」

そう言ってオレの肩を掴んでオレを連行する

何か怒られて職員室に呼ばれたときくらい怖い…いや、それ以上か

白ひげに近づくにつれて震えが大きくなり動悸が激しくなる

そして白ひげの5メートル前くらいに来ると足を止めた

「グララララ！大層なナリしてるくせに震えてんじゃねえか！」

「そう言つてやるなよい子供がオヤジにここまで近づいて気絶しなかつただけで凄い事だよ」

「そりゃそうだ！オヤジは子供に嫌われるからな！」
と隊長たち

「ワハハハハッ違えねえ！」
と皆笑い出す

前にも子供と同じような事があつたのか皆声を揃えて笑う

チツ……こつちには笑えねえ冗談だぜ
近づいただけで子供は気絶だと？まあオレは精神年齢は17歳くらいだけだな！

つて言うかだんだん本題からそれて行つてる
話を戻さなきゃ
勇気を出して口を開く

「あの〜何でオレは呼ばれたのでしょうか？何か御用でも？」

「おおそうだ！マルコが言うにはお前は領海を荒らしていた海賊をとつちめてくれたそうだな礼を言うぞ」

「ああ、アレはオレに襲いかかってきたから倒したんですよ」

「だがお前エどうやってガキが大人を倒したってんだあ？」

「・・・・・・・・・・」

ヤベエどうしよう……能力者だって事ここでバラしたら巡り巡ってまだ白ひげ海賊団に所属している黒ひげ　マーシャル・D・ティーチに聞かれるかも知れない

ヤミヤミの実を手に入れるであろうアイツに聞かれれば後々戦うかった場合無能力者だと思わせていた方がこっちにとって都合がいいまあこの逃げ腰のオレが戦うかは怪しいところだが念には念を入れておく必要がある

それならサッチを殺させないようにしてヤミヤミの実を食わせないと言う方法があるだろうがオレ的にそれは無い

何故ならもしここでサッチを助けでもしたら確実に未来が変わってしまう。それだけは避けなくてはならない

オレの原作知識が通用しなくなった場合困るのはオレだ、だから原作ブレイクなどせず傍観する事に決めたのだ。だってオレビビリだもん

だから、オレは今の所白ひげやエースを助ける気はさらさら無い。仲良くなりでもしたら情が移ってしまいそうなので、原作キャラと

はあまり関わりたくない

故にこちらの情報をくれてやる義理はないはず！

「えーっとそれはですねー、あいつ等島に居た動物達より強くなかったんですよ。だから倒せたんですよ・・・多分・・・」

「ほおーそれじゃあそれなりに闘いは出来るってこったな？」

「・・・・はい、一応ですけど・・・・」

「おい！誰かコイツの相手してやってくれ」

な〜んかマズイ事になってきたぞ。ここは丁重にお断りして・・・

「さいしよはグー、ジャンケン　ポンッ」

あぁ〜なんかジャンケンしちゃってるよ

断りにくいな・・・

「あの・・・よっしゃあー！決まったぞー！」

チッ・・・遮った上に決まっただど？ふざけんな！

こっちの意志は無視かい！って心の中で言っても無駄か・・・

「おう！決まったか！どいつだ？」乗るなよ白ひげさんよ

「オレだよい」

ってお前か！？マルコよ・・・手加減してくれよ！頼むから！
よしこっちからサインを送ってみるか：

「お手柔らかにお願いしますよ」

「おう！手加減しねえぞ！覚悟しとけよい」

アンタ人の話聞いてたか！？こっちからのサインスルーしやがって

「それじゃあ始めるぞゝみんな下がれゝ」

そう言って審判的な奴がみんなを下がらせる

そしてみんな下がって円状にオレとマルコを囲んだ

クッソゝオレを下がらせてくれよ！しかも逃げられねえように囲む
とはなかなかやってくれるじゃねえか！傍から見たら子供をリンチ
してるだけだからな

「試合開始ッ」
レディファイト

畜生マルコも流石に子供相手に能力は使わないとは思うが油断してはならない

普通に戦っても瞬殺されるだろう

こうなったら、能力を使わないようにするために買った刀を使うしかない、素手だとこっちの骨が確実に何本か折られる
刀で戦ったところで変わらないだろうが

それでもやらないよりマシだ

鞆のチャックを開けて【月蝕】を探し出し引っこ抜く

鞆は邪魔になるので足元に捨てた

「お前そんなのその小さい鞆からどうやってだしたんだよい」

「これは企業秘密なのでお教えできませんね」

「そうか準備が出来たんなら掛かって来いよい」

「いいんですか？じゃあ遠慮なく行きますよ」

オレは全速力で駆け出す

無人島では、重力を三倍にして生活していたのでそれなりにスピードはある

まあ剃やギア2とまではいかないが・・・

そして【月蝕】のリーチ内に入ると思いつき振りぬく
多分これを生身で受け止めればお陀仏だろう
さて、どうする…

ガシッ

そう思いながら振りぬいた刀はマルコが難なく受け止めた

「お前刀は素人だろ？ 良い刀だがそれじゃあ斬れねえよい」

そう言っ て【月蝕】が弾かれる

オレは確信していたオレがいくら素人だろうと【月蝕】の切れ味は
大業物だけにハンパないそれを素手で
受け止める事はまずありえない絶対アイツ覇気使ってやがる
ガキ相手に何て事しやがる！ 大人気ねえな……

能力を使わず刀も効かないそんな相手にどう立ち回るか……

こうなったら……バレないように能力使うか……いや、ここはワザ
と負けようかな…

どっちにしたって負けるなら、余計な事は考えず少しでも自分の力

を高める事に専念しよう
そうと決まれば、全力でやるか！

……
と言っても能力をバレないように使いつつ、隙を見て戦うだけだが

まずは隙を作らないとな

そう思って刀を握りしめる

マルコはこっちから攻撃しない限り攻撃してこない
ならば、こっちから行くしかない

マルコに向かって刀を構えながらジャンプして上から襲い掛かる
この世界では前の世界では出来ない事がたくさん出来る
たとえば、今みたいな超跳躍とか素手で大木を破壊とかね……
そんな訳で、攻撃したのは良いけどあっけなくかわされてしまった

それでも、めげずに連続して攻撃を加える

あるいは、かわされ

あるいは、いなされ

あるいは、弾かれそして、オレの攻撃は全て受け流されてしまった
しかし、これは計算の内

そして、全ての攻撃を受け流しきったマルコは一瞬動きが止まる

動きが止まった隙にオレはマルコの足元の空間にロックを掛ける
ロックを掛けたところで目に見える変化は無くマルコも皆も気付いていない

ここでマルコに襲い掛かった

マルコは避けようとするが足が動かないので尻餅をついてしまった
異変に気付かれないように能力を解除してマルコの喉元に【月蝕】
を突きつける

「チェックメイトですね……負けを認めて下さい」

「……そんな訳にはいかまい！」

オレは勝ったと油断していたのかもしれない
突然マルコの身体から青い炎が上がる
そして、鳥の足に変化した足で腹を蹴り飛ばされた

ドオオオオン!!!!と盛大な音を上げ壁にぶつかる

「ヤベエ……骨の何本かはいつちまったかな？」
多分折れてしまっているだろう

「調子に乗りすぎたかな? ……」
意識が遠のいていく……

すると頭の中に声が響いた

『オイ！小僧その程度か？その程度で俺を使おうと思ったのか？シャバに出るのも20年ぶりだったのに……まあいい使い方を身体に叩き込んでやる！身体を貸せ！』

ここで意識を失ってしまった

S I D E ..マルコ

蹴り飛ばした壁から大量の砂煙が上がっている

やり過ぎちまったかな・・・子供相手に覇気はおろか能力まで使っちゃもうとはよい・・・

仕方無い俺が負けたとあっちゃオヤジに面目が立たねえからな

しかし何であの時足が動かなかったんだ？

まあそれは後で調べるとして・・・まずは気絶しているであろうアイツを助けにいなきやな

未だに砂煙が上がっている壁に近づくと・・・何かが赤黒く輝いて

いる

するといきなり砂煙が弾け飛んだ

そこにいたのは・・・瞳の色が暗い赤色、刀身も同じ色に鈍く光っている【月蝕】を持ったエンマだった

いや、エンマの形をした何か

ただ、決定的に違うのはさっきとは比べ物にならないくらいの殺気

「お前は何なんだよい」

『さあ？俺は俺だからな質問の意味がわからないな』

「なら力づくで答えてもらおうよい！」

マルコが青い炎を纏わせながら襲い掛かる

そして、リーチに入ると渾身の蹴りをお見舞いする

ガキイイイイイン！

蹴りは片手に持った【月蝕】によって軽々と止められてしまった

『この程度か・・・』

そうつまらなさそうに呟くとマルコを刀で押し返して壁に激突させた

「チッ・・・何て力だよ。全く歯が立たねえ」

「大丈夫ですか隊長！お怪我は？」

そう言って部下が近づいて来る

『邪魔だ・・・カスは引っ込んでろ！』

エンマ？が辺り全体に覇王色の覇気を放つ

「うっ・・・！何て殺気だよ」

自分でもここまでくらのだから他のやつは気絶しているだろう

案の定俺の部下は気絶していて海賊船に乗っているほとんどの者が気絶していた

辛うじて隊長達と他数名が立っているくらいだ。ただ白ひげには1ミリもくらってないが・・・

『ほう・・・ここまでの人数が立っているとは驚きだな…流石は世界最強の海賊団ってところか』

こっちは結構満身創痍だったのにあっちは余裕だ

こっちも能力全開で行くか！身体から青い炎が噴出し叙々に形を創り一体の不死鳥フエニックスになった

これならいくら攻撃されても再生できるし上空から攻撃できるこっちが有利だ

いきなり飛び上がり上空へ舞うここなら刀のリーチには入らないから隙を見て攻撃できる

ザクウウウツ

するといきなり身体を引き裂かれた
しかし、身体はすぐに再生する

『ほお！再生するのか面白いな』

エンマ？は知らなかったのかびっくりしている

本物なら全巻もといジャンプを買っていたので知らないはずはないのだが

「チツ・・・ここまで攻撃できたのかよい！面倒だな」

だが再生するので意味は無い
ここが攻撃に移るチャンスだ！と思い急降下する

『斬波・蓮』

無数の斬撃が襲いかかってくるがすぐに再生する

「もらったよい！」

急降下しながらの蹴り重力も重なって威力が倍增する

『チツ・・・受け止めるのは流石にムリか・・・』

【月蝕】で防いでいたがあまりの威力に後ろに下がる

『そろそろ本気を出すか・・・小僧の身体に俺の使い方を教えなきゃなんねえしな』

そう言うと言を片手に巻きつけて固定すると、マルコに向かって【月蝕】を放り投げた

「なっ！」

投げられた刀は片方の翼に突き刺さる

再生するかと思われたそれは再生する事無く逆に血が噴出す

「うぐっ・・・何故！」

エンマ？は刺さったままのマルコごと鎖で地面に叩きつける

ドオオオオオン！

マルコは半分だけ人型に戻り翼から刀を引っかく

地面に叩きつけられたダメージは無いが刀に貫かれた事による出血量が体力を奪う

次に攻撃されるか自分の攻撃で倒れてしまうだろう

すると目の前のエンマ？が血を吐いて膝を突いた

『ウグッ・・・動きに身体がついて来られなかったか・・・まあ骨も何本か折れていたしな・・・オイ！その鳥！コイツの身体をたのむぞ！』

「結局お前は何なんだよい！」

『さあな・・・後でこの小僧にでも聞いてみな！』

そう言ってエンマ？は気絶した

気絶したと同時に【月蝕】とエンマの瞳の色が戻った

「一体何だったんだよい」

呆然とするマルコに白ひげが

「何してやがる。さっさとアイツを運ばねえか」

「ああそうだな血を吐いてたしな」

「後マルコよ、後片付けしとけよ」

「冗談はやめてくれよいコレを全部俺がかよい」

目の前には倒れた部下達壊れた壁や床
見ただけで溜息が出る

「おゝいお前達も手伝ってくれよい」

この後マルコは隊長達と数名の部下とエンマと気絶した人を運んだり後片付けをしたそうです

第八話 決闘？（後書き）

戦闘シーンは嫌ですね

だってめんどくさいですからね

見てくれたひとありがとうございます

第九話 対話？（前書き）

だんだん適当かつゴチャゴチャになっているので
軽めに読み流してくださいね

第九話 対話？

「んっ……」

目を開けてみると見覚えのある天井があった
オレがヒノモトに運ばれるときに使っていた部屋だ

そうだ！オレはマルコに負けて気絶したんだっけ……
まあ当然の結果だけどな！この世界にゃあ強い奴なんかゴロゴロい
るしなオレ覇気使えないし……

部屋で自問自答していると、ドアが開いた

「起きたかよい 三日間眠りっぱなしだったぞ」

「三日間も！？」

三日も寝てしまうとは……オレとした事が……ってもこの世界じ
やいつも寝てたんだけどね

「まあ仕方無いよい 鎖骨、肋骨、後右腕の骨も折れてたんだか
らな」

「そんなに折れてたんですか！？しかもそんな他人事みたいに言わ
ないで下さい！誰のせいだと思ってんですか！」

「まあそう言うな・・・仕方無ねえじゃねえかよい　こつちも手加減してる余裕なんて無かったんだよい」

「嘘つかないでくださいよ！オレ瞬殺されたじゃないですか！」

「その後だよ　お前からやられてこんなになっちまったんだからな」

そう言って服をずらして左肩を見せる
そこには、少し血が滲んだ包帯が巻かれていた

「何ですか？マルコさん再生するでしょ？」

「確かに普通の攻撃だったらな。海楼石や覇気の攻撃は再生できないしダメージも残るんだよい」

「覇気？オレ使えませんよそんなの　刀に海楼石でも入ってたんじゃないですかね」

「海楼石じゃあないだろうよい　まず海楼石は黒じゃないしな！後残るは覇気しか無いだろうよい」

「覇気？だから使えないって言ってんでしょ！聞いてました人の話」

「ああでもな　お前は実際に覇王色の覇気使ったんだよい　だから武装色使えても何ら不思議は無いだろうよい」

は？オレが覇王色の覇気を使った？武装色も？悪い夢だぜそれが本

当だったら嬉しいけどな

「そうですね！オレ最初に蹴られた時に気絶したんで覚えて無いので何とも言えませんけどね・・・」

「そうだなあの時のお前はお前じゃなかったみたいだったしな瞳の色もしゃべり方も違ったしな」

「んっ・・・思い出せ・・・うっ・・・頭が」

なんだか頭が焼けるように痛いし・・・何か聴こえる

ここで意識が飛んでしまった

それでいま何か真っ黒な空間にいるただ空と思われる部分に赤黒い月が浮かんでいる

『オイ！小僧』

おお・・・何か月から声が聴こえる・・・何気にキモイな・・・

『ああ！キモイだと！調子に乗るなよ！カス！』

心読まれた上に罵倒された！何なんだアイツは

『ん？オレが何で心を読めるかって？そりゃ当たり前だろここはお前の頭の中だからな』

オレの頭の中コレ？何にも無いんだけど
オレ何考えてんだ？あっ！遠くに【睡眠 命】って文字が浮かん

でる！さすがオレ

『まあお前の頭の中基本空っぽだからな』

「いちいち痛い所突いてくんない！まずお前は誰だ」

『……お前本当に覚えてないのか？』

「まあ気絶してたからな！気絶する前になんかの声が聴こえた気がしたけどな」

『まあ俺名乗ってないけどな！』

・・・うぜえ。オレの頭の中だから思い通りになるよな！
よし！あの月爆破しよう！

ドカアアアアン！！！！

うん・・・マジで爆破したな

仕方無いオレの頭の中でオレに逆らったからだな

『・・・ってゝまったく何て野郎だ俺を爆破するとは』

チッ・・・復活しやがったか……もう一回爆るか

『ちよっ・・・マジやめて痛いから』

ほう・・・痛いのか良い事聞いたな

「おい爆破されるのが嫌なら今から質問する事に正確に答えろ……
答えなかったら……分かるな？」

『ハイイイ・・・仰せのままに・・・』

「じゃあ・・・まずお前は何だ？」

『・・・俺は【月蝕】だ』

「・・・お前が？刀に自我なんてあるのか？」

『ああ……この刀は少し特別でな…使用者の自我もとい精神力を喰
つて力を発揮する』

「じゃあアンタは【月蝕】に取り込まれた自我って事か？」

『おお！そうだ以外に察しがいいな！頭空っぽの癖に』

「・・・痛みを10倍にして爆破してあげようか？そしたら、その
減らず口も治るかもしれないしね」

『スイマセン モウ イイマセン』

「まあいい…自我を喰われるって事はオレの自我も喰われてお前み
たいになるのか？」

『まず在りえないな・・・【月蝕】が喰う自我は微量だし、喰われ

た自我（精神力）は時間とともに回復する』

「じゃあ何でお前はそんな風になってんだ？まず在りえないんだろ？」

『俺が俺じゃ無くなったと言っても言っておこうか』

「ん？自分が自分じゃなくなる？現にお前の自我は存在しているし、俺を選んだのもお前だろ？」

『それは違うな・・・小僧を選んだのは【月蝕】だ！俺じゃない俺は奴に取り込まれた意識に過ぎないからな俺には【月蝕】に干渉する事が出来ない お前の意識を乗っ取る事は出来るが…』

ん？・・・今オレの意識を乗っ取るって言ったか？

すると何？霸王色の覇気使ったのもマルコに傷を負わせたのもコイツか？

じゃあコイツのせいでオレに変な容疑が掛けられてるって事か？

「・・・お前さ、オレの意識乗っ取った事ある？」

『ああ！あるとも！ちよっとお前の身体を傷つけちゃったがな！ハハ』

やっぱコイツか・・・ちよっとお仕置きが必要だな・・・

ドカアアアアン!!!!

痛み10倍にして、しかも同じ痛みを感じながら再生するようにしたやつは懲りていないみたいだからな・・・これくらいしないとお仕置きにならないからな!

『ヴァアアアッいつてええええっ!!!!!』

素晴らしいながら破片が戻って再生していく

結構面白かったな! もう一回……

『いや、やめて! 痛いからもうしないからやめて! お願いします!』

「・・・もうするなよ! それで話を戻すぞ、確か【月蝕】がオレを乗っ取ったって話だったな」

『おおそうだ』

「それで覇気を使ったのもお前だな」

『YES!』

何か言っつけどスルーしよう

「じゃあアレはオレの覇気？それともお前の？」

『俺のに決まってるんだろ！身体乗っ取っても俺の意識で覇気は使えるからな』

チツ・・・肝心なとこだけコイツの力かよ

『まあ気にすんな！覇気はあの鳥から教えてもらえばいいだろ』

「まあ・・・そうだな！うん　そうするよ」

『代わりと言っちゃなんだが、お前の頭と身体に【月蝕】の使い方を焼き付けておいたから　それなりには使えるだろ』

「ああ　すまん・・・しかし、この事をどう説明するんだよ？」

『この事って？』

「・・・お前がマルコに言ったんだろ？「お前は何？」みたいな質問の答えオレに聞けって言ったんだろ！」

『ああゝ言ったかも知れんな』

「適当な事言いやがって！どう言やいいんだよ！お前の事！」

『正直に言えばいいだろ！』

「気味が悪いって言われるに決まってるんだろ！お前何人も人殺して

「んだろ!？」
「ん? お前が殺されたのか?」
「ううゝ訳わかんねえ」

『んゝそうだなゝ氣に喰わない使用者たちを殺してきたのが【月蝕】でゝゝ仕事でたくさん殺してきたのが俺って事だな！』

「お前殺し屋なんかやってたのか？」

『ちよつと違うな 俺はお偉いさんの命令で対立するグループの要人を殺したりする暗殺者だ』

「……ん？　て事はお前が最初の【月蝕】の使い手か？」

『そうだ』

「まあいいや今更お前に敬語使う気無いし尊敬もしてないしな！」

『ヒドツ』

「て言うかお前キヤラ最初と変わってねえか？」

『いや、少し脅かそうとしたんだけど意味無かったからやめた!』

「ふうん・・・どうでもいいけど お前の事はオレのもうひとつの人格だと言っておくよ刀に喰われた自我なんて言っても信じてもらえないだろうしな・・・」

『だろぅな（笑）小僧の嘘の方が信憑性があるよ』

「そりゃどうも……ところでここから出たいんだけど……どうすん

オレの頭の中で意識が飛ぶと

今度は現実世界で目が覚めた
クッソオゝ頭痛え

「おい！大丈夫かよい！また倒れたからビックリしたぞ」

おっとそうだったなマルコが居たんだった

そういえばオレ今度はどのくらい寝てたんだろう・・・
聞いてみるか

「えっと・・・オレどのくらい気絶してました？」

「どのくらいも何も倒れてすぐ起きただろうがよい」

という事は、向こうでの時間はこっちの一瞬にも満たないって事か

「そうですか・・・オレ今日はキツいんで、寝てもいいですか？」

マジで今日は頭が痛いので、話す気にはなれないな・・・

「ああ・・・今日はもう休んだほうがいいよ　じゃあオレは出

て行くからな」

「ありがとうございます・・・この間のことは明日話しますね」

「ああ明日な！おやすみ」

「お休みなさい」

マルコが出て行ったあとオレもすぐに眠りに落ちた

第九話 対話？（後書き）

これから投稿ペースが落ちると思いますが
応援よろしくお願いします（笑）

ここでアンケートをしたいと思います

エンマは白ひげやエースを助けるべきか否か

1、助ける

2、助けず傍観する

コレの結果がこれからの展開につながるので
1とか2だけでもいいのでよろしくお願いしますね

第十話 説明？（前書き）

いやゝやつと私立受験が終わりましたよ

2校受けたのですが

無事両方とも合格することが出来ました

これから少しずつだけど更新していこうと思います

まあ公立受験が残っているので頻繁にはムリですが・・・

第十話 説明？

次の朝早くエンマは目覚めた

日が昇るか昇らないかわからないだから皆寝ているだろう

しかし、オレにとっては都合だ

最近は能力の修行も出来てないし、何より【月蝕】の使い方は、頭に入っているが
出来るかどうかは別問題だからな

数分後普通の真っ黒い着物に着替えて外に出た

船の近くに森があったのでそこに入った

「先にどつちをしようかな・・・」

んゝやっぱここは能力からいつとくか！誰かが起きてくる前に終わらせないとな

剣術はマルコと月蝕が戦ったときに見られてたからいいけど能力はまだ誰にも知られてないし、知られる訳にもいかないからな

さっそくここに来る途中に思いついた新技を使おうと思う

イメージ的にはカ○シ先生の”神威”というかまんまそれ

結構他のマンガの技とか役に立つしオレの能力で使えそうなやつ多いんだよね

今度マダラの吸い込むやつとか試してみよう！

まあそれは置いといて今は新しい技の練習だ

まず目の前にある木に向かって空間を捻じ曲げながら別空間に飛ばそうかな

手を木に向けて捻る動作をする

これは、かっこつけたいからじゃなくてイメージがしやすいからしてるんだぞ

最初なのでゆっくりと腕を捻る

それと同時に目の前の空間も捻れていく

そしてこれを異空間に飛ばす

なっ！！！

飛ばそうとした空間がいきなり逆に捻じ曲がり膨張を始める

急いで元の方向に曲げるが逆にこっちが負けてしまった

無駄な抵抗をしている間にも膨張は続いて行き森の約半分を飲み込み捻じ曲げる

ヤバイこのままでは後約5分程で街まで到達するだろう

クソッ！！仕方無い！森は諦めよう早めに消し飛ばして置くべきだった！

膨張した捻じ曲がった空間を最初と逆の方向につまり、今捻じ曲がっている方向に沿って消し飛ばした

オレが消し飛ばすために捻じ曲げたため更に加速し被害が拡大してしまった

なんか隕石が落ちたみたいなクレーターが出来ている

やっちまった♪やっちまった♪やっちまった♪YES♪オレが……

こんな事やってる場合じゃ無え！逃げろ！

「転移！」

さっさと自分の部屋に転移して
現場からとんずらした

オレしーらないと

ベツトに潜ってよう

すると、コンコンコンツとドアを叩く音がした

あ！……2回だとトイレのノックだからね
皆さん気をつけて！……ってオレ誰に向かって言ってるんだろ……

「ど・・・どうぞ」

「入るぞ」

そう言ってマルコが入って来た

「悪いなこんな朝早く」

悪いと言っているが罪悪感を全く感じさせない
そして、こう続けた

「朝早く来たのはな・・・お前自身についての事だよい、昼間なんかだと誰に聞かれているかわかったもんじゃねえからよい」

「・・・確かにそうですね・・・それじゃあ話しましょうか」

まず月蝕について、そして月蝕の自我については、オレのもうひとつの人格だと話した

疑われるかと思ったが、オレの豹変ぶりが凄かったらしくて信じてもらえた

まあオレ自身の事についてははぐらかしたが・・・

そんなこんなで1時間くらい話したところで客が来た
白ひげ海賊団の船員だ
酷く慌てながらこう言った

「マルコ隊長！ここに居られましたか！」

「どうしたんだよい」

船員は一旦深呼吸して事を話した

「そ、それが・・・この島の森の約半分が消し飛ばされています！」

「何だと！？森の半分！？敵が攻めて来たのか？」

「いえ、敵は1人も居ませんでした！それに森は破壊されたと言う
より、捻じ切られたように決まっています！」

ヤベエ！バレた！しかも敵が攻めて来たと思ってるし
はいはい！オレがやりました！…って言える状況じゃないし

どうしたもんか・・・

「一応オヤジに報告しとくか・・・」

白ひげに報告されたら本格的にヤバイな・・・
だが、どうやって止める？

マルコに話したところで白ひげへの報告は止まらないだろうな

こうなったら白ひげだけに事情を話して黙ってもらおうか・・・

白ひげ口堅そうだな・・・よし！そっちにすっか！

「エンマ！お前はここに居るんだよい、敵が居るかもしれないから
な」

ヤバイ！このままじゃオレの計画が破綻してしまう！

そうはさせるか！

「ちょっと待ってくださいよ！この間は、あんまり挨拶出来なかった
ので、ちゃんと挨拶しておきたいです」

マルコは少し考えてこう言った

「確かにな……それに俺たちと居た方が安全だしな」

キターーーー！！！！作戦成功！ハハッ！オレにかかればこのくらい余裕だぜ

「それじゃあ行くよい、着いて来い」

オレが優越感に浸っている間にマルコと部下は、部屋を出ようとしていた

「あ！はい今行きます」

オレは慌ててついて行った

第十話 説明？（後書き）

もともと遅い更新が更に遅れてしまってますみません
自分はパソコンで絵が描けないし、しかも載せ方もわからなかった
ので

エブリスタのマイページに載せています

作者名は同じなので、よかったら見てください

アンケートは2月いっぱいまで受け付けます

第十一話 ミスそして謝罪？（前書き）

遅い上に短い更新ですが
暖かい目でみてください

第十一話 ミスそして謝罪？

マルコに連れて行かれたのは、白ひげの寝室

あのエースが白ひげを殺そうとして返り討ちにあった所だ

なんかロケ地巡りしてるみたいだな・・・まあ楽しいけど・・・

コンコンコンッ

マルコがドアをノックして入っていった

数十秒後マルコが出てきて入ってこいと言ったので、マルコに続いて入った

白ひげは、ベッドから起き上がっている状態だが軽くオレの2～3倍はある

しかも威圧感ハンパない

怖えゝなあ

逃げ出したくなってきた

すると少しして、白ひげが口を開いた

「それで話ってのは何だ？マルコ」

「・・・それが、この島の森の3分の2が何者かによって破壊され

「たんだよい」

そう言うときさっきまで、普通？だった白ひげの雰囲気は鋭いものに変わった

「マルコ、怪我人は出たのか？」

「いや、島の住人にもウチの船員にも怪我人は出てないよい」

「そうか・・・犯人が分かり次第捕らえろ、まだこの島に居る可能性が高い」

・・・うそくん

ヤバイぞ死亡フラグが立ってしまった！まだ死にたくねえよ

「わかったよい、俺も部下を連れてその辺りを搜索してくるよい」

クッ、もたもたしてる間に状況は更に悪化してきてるな・・・

マルコは部屋から出て行く時思い出したように言った

「ああ！そういうえば、エンマがオヤジに挨拶がしたいそうだよ、俺は出て行くけど聞いてやってくれ」

おお！やっとオレに話を振ってくれたか！ちょっと遅かったけどナイスだ！マルコ

「おいしいぞ俺も小僧と話したかったからな」

それから、マルコはさっさと出て行った

どうしよう・・・どこから話せばいいんだだろう
クッソクこうなったらやけだ！

「えーと・・・あの・・・ですね・・・とりあえずごめんなさい！」

オレは伝家の宝刀”土下座”をしてやった
プライド？何それ食えるの？

「いきなりどうしたんだ？オメエ」

いきなり土下座したので、びっくりしているようだ

「そ、その・・・言いくいんですけど・・・森を壊したのはオレ
なんです・・・」

素直に謝っても許してもらえないとは思ってないが、自白した方が後
で見つかるより刑が軽くなるかも知れない・・・

白ひげの判決は・・・

「グラララ、頭を上げろ。馬鹿言ってるじゃねえよ。小僧、オメエの力じゃムリだ。マルコとの戦いを見せてもらったが、それ程の力があるとは思えねえぞ」

そう来るか・・・確かにね・・・刀なんかじゃ無理だろうね・・・

このまま能力を隠し通すのも悪くないが、マルコや白ひげ海賊団の人たちが犯人を捜索し続けさせるのは可哀想だ

ここらが潮時かな・・・

「・・・白ひげさん、これから聞いたこと見た事全て他の人には話さないでください。もちろんマルコさんにも・・・」

白ひげは、エースがロジャーの息子だって事も他の奴に話していないみたいだから不用意に話さないだろうけど一応釘を刺しておいた

「わかった。で・・・それは話つてのは何だ？」

「・・・実はオレは能力者なんですよ」

「でもオメエ、マルコの際は使ってなかっただろう？戦闘に使えない能力なのか？」

うん・・・流石”四皇”白ひげ様オレが能力者だって言っても微塵も驚かない

それどころかオレの能力について分析しやがった

「オレの食った実は”クウクウの実”超人系パラミシアです。能力は空間操作、創造、無空間創造なんかです。一応マルコさんの時使ってましたよ」

「何時だ？」

「えっと・・・あのいきなり尻餅ついた時です。マルコさんの足元の空間を固定して足を動かなくしたんです」

「あの時か・・・少しおかしいとは思ってたが、まさか能力だったとはな・・・」

少し考え込む白ひげ

そして、答えが出たのか口を開いた

「そうか…森もお前の能力で破壊したのか？」

チツ・・・もう気付きやがったか…仕方無いストレートに話すか…

まあ【月蝕】やオレが別の世界から来た事は話さないが・・・

そして、オレは何故森を破壊してしまったのか、不慮の事故だなど

と言いつつオレの能力について洗いざらい話し、転移など能力を見せた

そして、能力者だという事を皆には、言わないで欲しいと言った

そして、話が終わると白ひげは、こう言った

「グララララ！面白れえ小僧だ！気に入った、俺の息子になれ！」

・・・は？

・・・今、何て？

オレがびっくりしていると、白ひげが諭すように言った

「今すぐじゃなくてもいい、しばらく俺の船に乗ってから決めろ」

「は、はい！よろしくお願いします」

オレが息子になるか決めかねているとそう言ってくれた

「それで森の事だが、俺がマルコ達に適当にごまかしといてやる。

能力者だって事バレたくねえんだろ？」
おお！神だ！がここ神にる！

この後白ひげが皆を治めてくれて事件は事なきを得た

第十一話 ミスそして謝罪？（後書き）

感想ご意見お待ちしております

番外編

STRONG WORLD プロローグ（前書き）

ちよつと話に詰まったので時間稼ぎします

番外編

STRONG WORLD プロローグ

ウーーーーー！！！！

激しいサイレンの音が鳴り響く

タタタタッ

そして、海兵達の慌ただしく走る音

日本の城のような形をしたここは、海軍本部
海軍の総本山である

そのテラスから、憎々しげに外を眺める男が2人

男達が見つめる先には、フワフワと空に浮かぶ幾つもの海軍の軍艦

「…イカれとる」

メガネを掛け、頭にカモメのようなものがよな付いている帽子を
被った初老の男性

海軍元帥『仏』のセンゴクが、ポツリと呟いた

「こんなマネができる男は、わしゃ一人しか知らん」

それに答えるように言う白髪に白い口ひげを蓄えたこれまた初老の男性

海軍の『英雄』ガープ

そう言ったとたんに空中に浮かぶ船、いや島と言ったほうが良いくらい
の巨大船が真上を通過する
その船には海賊旗『ジョリーロジャー』ドクロに陀輪それに獅子の
鬘のようなマーク
それには、無数のオールが付いており動くたびに連動している

ビュオオオオオオ

二人は、いきなり現れた船を見上げる

「あっ！」

慌ただしく走っていた海兵たちも気付き見上げる

「海賊王『ゴール・D・ロジャー』時代の生き残り……」

「20年も……どこに姿をくらませとったのか……ロジャーに破れ、
とっ捕まっておったくせに……両脚を切り落として、足枷を外し脱獄

した男」

灯台のライトが光り、船を照らす

ライトが当たると一人の男が照らし出される

その男は、東洋風の格好をしており、葉巻を銜えていて、黄色に橙色の上着を着ており、頭には陀輪が刺さっている

「金獅子のシキ」

センゴクが憎々しげに言う

そして、その男シキは片方の手を挙げこう言った

「これは、警告だ」

そして、閉じていた手を開くと一斉に浮かんでいた海軍船が墜落する

ズオオオン

驚く海兵たち

「うおおーっ！！！！」

ドゴオン

ドバーン

ドガアアアン

海軍船が海軍本部のいたるところに落ちていく

ザブーン!!!!

「わっわっわっわ……!!」

広場の湾に落ちた海軍船が津波を起こし海兵たちを飲み込んだ

しかし、海兵たちも負けじと大砲で反撃する

ドオン ドオン

だが飛んでいるシキの船には掠りもしない

それを見ていたガープが口を開く

「おとなしく伝説になつとりゃいいものを・・・今さら…世界に復讐でもしに来たか！」

それを知ってか知らずか高らかに笑うシキ

「ジーッハッハッハッハッ・・・！！！！」

その声の残響を残してシキは去って行った

それを傍らで見ていた黒髪に黒い瞳の“暁”の赤い雲が白くなった
ような着物に身を包んだ少年

「始まった・・・か」

少年はそれだけ言うと一瞬でどこかに消えた

番外編

STRONG

WORLD

プロローグ（後書き）

これはこれできついですね
ミスった

番外編

STRONG WORLD 1-1 (前書き)

嫌ならすぐに終わらせようと思うので言ってください

「ハア ハア ハア ハア 」

軽装をした少年が息を切らしながら鬱蒼と生い茂るジャングルの中を歩いていた

少年の名はモンキー・D・ルフィ

彼は海賊？麦わらの一味？の船長で悪魔の実の能力者、その首には3億ベリーの懸賞金が懸かっている

ルフィが目の中の草を掻き分けると

ルフィの目に空に浮かぶ綺麗な島々が映った

虹や雲が架かりとても幻想的だ

しかしルフィは、「早くアイツら捜さねえと」そう言って首に掛けてあった麦わら帽子を被り、走って島から飛び降りた

ビュウウウウ

そう風切り音を上げて下にあった島に落下する
普通なら死ぬだろう。だが、ルフィは悪魔の実の能力者だ

「ゴムゴムのオ・・・あわわわわわ」

口を開くと大量の風がルフィの口に入ってきた

「風船！」

ルフィはそれを吸い込んで身体を膨らませ森に軟着陸した

しかし、次の瞬間ルフィはランドゲーターというワニのようなクリ
ーチャーに追い掛けられていた

「うわあっ」

木を次々と避けながらランドゲーターから逃げるルフィ

「うわーっハッハッハッハッハッ」

ルフィが後ろを振り返るとランドゲーターは、すぐそこに迫っていた

「ゲゲッ」

ランドゲーターに喰われる直前、ルフィは高いところにある木を掴みパチンコの要領で飛んでいった

「うわあああああ・・・」

それでも追い掛けようとしていたランドゲーターは突然横から伸びてきた足に捕まった

捕まえた主は身体中にコケが生えている？森ダコ？と呼ばれる大タコ
森ダコは、ランドゲーターを空中に持ち上げると、他の足を丸め拳のようなものを作りランドゲーターをラッシュした

ドスドスドスドスドスッ

ランドゲーターは、吹き飛ばされ今度は、森ダコがルフィを追う

「うわっはー」

飛んでいったルフィが、森を抜け着地を決めると

グボボボボボボ

森ダコが森を破壊しながら追い掛けて来ていた

「えっ！アレ！？」

ルフィはめっさ嫌そうな顔をして叫んだ

しかし、立ち止まっている暇は無いルフィは森ダコから思いっきり逃げた

ルフィが逃げていたら前方から何かが飛んできた

バザザッ

「カマキリ！？」

前方から飛んできたのは巨大なカマキリのクリーチャードン・カマキリ

ルフィに襲い掛かるかと思われたが、ルフィのすぐ側を素通りした

どうやらドン・カマキリのターゲットは、ルフィでは無くその後

ろに居る森ダコのようにだ

しかし、素通りしたドン・カマキリリの起こした風圧で、ルフィは吹っ飛ばされた

「うわわアダダダ…グエツ」

ルフィは、あっけなく地面を転がる
転がるたびに荷物が落ちていった

数回転がったところで、顔面を強打し止まる

「イツ！」

だが、ルフィはすぐに起き上がってクリーチャーの方を見ると

ドン・カマキリリと森ダコが、交差していた
ドン・カマキリリは、何度か斬りつけてから人工物に止まった

森ダコは、なおも前進していたが、数秒後

スパパパパパッ

森ダコの足が木っ端微塵に切れた

森ダコは、一瞬顔に驚愕の色を浮かべ逃げ出そうとした

でも、ドン・カマキリリは、それを許さずすぐに、森ダコに追いつく
と一閃

一撃で森ダコはやられてしまった

キュシイイイイ！

ドン・カマキリリは、噴水のような人工物に止まり勝利の雄たけび
を上げた

そんなドン・カマキリリに魔の手が忍び寄る

後ろから伸びてきた太い腕がドン・カマキリリを掴み噴水に叩きつ
けた

叩きつけられたドン・カマキリリは、吹き飛んで地面に伏した

キュイイイイ……

ドン・カマキリリは、痛みに呻き声を上げるが、クマのクリーチャー
テログマは容赦なくドン・カマキリリの鎌を掴み持ち上げた

そして、抵抗しようとするドン・カマキリリを、テログマは締め上
げると……

ダアアアン

見事なバックドロップを決めた

ドン・カマキリリは、地面に刺さりそのまま倒れた

テログマはゆっくり起き上がると勝利の雄叫びもしくは、威嚇の為に
吼えた

バアホオオオオオオ！

それを胡坐をかいて見ていたルフィはどこか他人事のように

「次から次へと…ホントどうなってんだこの島は！？」と言っていた

するとテログマは、クンクンと臭いを嗅ぐとルフィの方を向いた

「んあ？」間抜けな声を出すルフィ天然なのかバカなのか・・・それは、神と作者の尾田栄一郎先生しか知らないだろう

ガアオオ

ルフィをみつけたテログマは、ルフィを倒すために走りだした

「んにゃろっ！ やる気か？ んんっ」

ルフィは立ち上がりファイティングポーズをとった後テログマに向かっていた

「ゴムゴムのオ……銃^{ビストル}——ッ！」

ルフィは、走っている勢いのまま、腕を伸ばしテログマを殴ろうとした

「うっ」

しかし、テログマはそれをかわしルフィを殴った

「どわあああああ！」

テログマに殴られルフィは、森の方に飛んでいったが腕を木に巻きつけ他の木を足場にして衝撃を耐えた

「そうだったこの動物はナメチャいけねえんだよな」

テログマは、仕留め損なったことが分かっているのかルフィを見て向かってきた

それを見たルフィは真剣な顔になって指を嚙んだ

「ギア・サード」

そして、ルフィは掴んでいた木を離し足場に使っていたためしなっていた木の反動を利用して跳んだ

「骨風船！」

ルフィは、噛んでいた指に息を吹き込むと腕が巨大化した

「ゴムゴムのオ 巨人の銃ギガント・ビストル一ツ！」

巨大な腕がテログマを捉え殴り飛ばした

殴り飛ばされたテログマは、一個目の銅像を粉碎し二個目の銅像にめり込んで気絶した

倒した当のルフィはと言うと・・・

ヒュウウウウ

そんな効果音を上げながら空中を舞っていた
口から大量に空気が出ていき身体がどんどん縮みながら狂ったロケットのように飛びまわっている

ボヨン

「うにっ！んっ」

全部空気を吐き出し苔むしたやわらかい物に着地した
身体の縮んだルフィは起き上がるとあたりを見渡し溜息をついた

「ハァー危なかった この技使うとちっちゃくなんのが厄介だなあ・
・ん？」

ルフィは下にあるものを見た

下には、ドン・カマキリリに倒された森ダコ

「このタコうまそうだ」

番外編

STRONG WORLD 1-1 (後書き)

勉強に身が入らないです・・・どうしよう・・・

番外編 S T R O N G W O R L D 1 - 2 (前書き)

市立受験が終わりました

ウザイR君も受けたので、R君が落ちている事を祈ります

まあこの市立よりバカな私立に落ちてるんで大丈夫だと思うんですけど・・・

不安です (＞|＜)

そのウザイR君の詳細は、活動報告で

番外編 STRONG WORLD 1-2

一方所変わって秋ゾーン

男女2人と骨？は、紅葉が美しい所に居た

女性は、海賊“麦わらの一味”の船員クルーで考古学者のニコ・ロビン
彼女の懸賞金は、8000万ベリーで通称「オハラの悪魔」と呼ば
れている

悪魔の実『ハナハナの実』の能力者

男性は、同じく“麦わらの一味”の船員で船大工のカティ・フラム
通称「鉄人サイボーグフランキー」
その名の通りサイボーグで懸賞金は4400万ベリー

骨もといガイコツは“麦わらの一味”で音楽家「鼻唄のブルック」
懸賞金3300万ベリー

悪魔の実『ヨミヨミの実』の能力者

何かを聞きつけたブルックは立ち止まって呟いた

「・・・なんでしょうか 今の音」

「知るかよ　それどころじゃねえだろ」

それに振り向きもせず答えるフランキー

しかし、ブルックは、振り向いて音が聞こえたらしい遺跡の方を見た
すると、黒くて小さい何かがウジャウジャ出て来た

「あーっ！　いやああああああっ！！」

「どうした！」

いきなり絶叫したブルックに振り向くフランキー

ブルックとフランキーが見たのは、軍隊アリ
頭に角のような突起があり、槍を持っている
しかも、それが大量に居た

「今度はアリか！」

ブルックを助けようと、駆け寄るロビンとフランキー

しかし、軍隊アリは、ブルックをスルーしてフランキーとロビンに
向かって来た

「チッ　狙いはこっちかよ」

そう言って手を外側に曲げ腕に内臓されている砲弾を打ち出そうと
するが・・・

「フランキー あなた燃料切れじゃなかったの？」

とロビンの冷静なツツコミ

「うおっ そうだった！」

フランキーは、コーラを燃料にしており、燃料がなくなるとリーゼントが垂れてしまう上力も無くなり風来砲などが撃てなくなる

ザバアッ

悪い事は重なるもので、横の池から、胴体の長い鯨のようなクリーチャーが出て来た

鯨の名はバクザメ

長い以外コレと言って特徴は無いがデカイ

バクザメは、一旦池に潜ってからフランキーとロビンに襲い掛かろうとした

それを、2人は走って避けた

ドボォオン

水飛沫を上げ再度池に潜る

「うひひ ひひひっ」

その姿を見たブルックは顔を抑え震えた

その姿も充分に怖いのだが・・・

そんなブルックを完全に無視しているバクザメは、泳ぎながら体勢を整えていた

「また来るわ」

ロビンがそう言うのと、後ろから軍隊アリも迫ってきた

「あっ・・・」

軍隊アリが迫ると同時にバクザメも襲いかかってきた

「チッ・・・」

フランキーは、舌打ちすると手の皮を剥ぎ鋼鉄の手を露にして身構えた

アリアリアリアリ・・・

軍隊アリは、突然バクザメに向かって飛び上がった

「おっ！」

軍隊アリとバクザメが、ぶつかりとバクザメの方が一瞬で喰われてしまった

「ぬおっ！」

ポチャーン

「アア 一緒・・・お2人ともご無事で!？」

骨だけになったバクザメを見て呟くブルックだがすぐに2人の心配をする

さっきの光景を見ていたフランキーが何かに気付いたようにブルックと軍隊アリを交互に見る

「オメエがまったく狙われねえ理由が分かったぜ」

「ん？」

何の事だか分からないと言いたげに返すブルック

それに対してフランキーが答えた

「オメエには、喰える『身』がねえもんな」

「あゝ・・・」

納得したように頷くブルックだが・・・

「ちょっと失礼じゃないですかア!!!!」

納得していなかった

それどころか激昂して剣を抜き軍隊アリに向かって走りだした

軍隊アリもロビンとフランキーを狙って向かって来た

ピュン

ピュン

ピュン

そう風切り音がした後

ブルックは走るのを止めコツコツコツとハイヒールの音を出しながら歩きだした

それを見たフランキーは、皮を手にはめ直し歩いてブルックの方に向かった

ロビンもそれに続く

アリアリアリアリアリ：

軍隊アリが向かって来ているのに2人は気にも留めていない

すると軍隊アリが2人に飛びかかった

しかし

「鼻唄三丁・・・矢筈斬り！」

ブルックがそう言って剣を鞘に戻すと・・・

スパパッ

飛び掛かろうとしていた軍隊アリは空中で切り刻まれた

アリの死骸が振るなか2人がブルックに追いつくと

ブルックが独り言を言い出した

「確かに骨ばった私ですけど、今 興味あることがあるんですよね・・・」

それに2人が耳を傾けるとブルックはキメ顔をつくって言った

「部分ヤセ」

・・・2人は、ブルツクの決め台詞を華麗にスルーすると、2人で話しだした

「しかし この島どうなってんだ！」

「動物も虫も見た事ない進化を遂げてるわね…人の知恵も力も及ばず強さだけがモノをいう世界」

「フン 弱肉強食の島ってワケか」

哲学的な話をする2人

もちろんブルツクはポーズをとったままスルーされていた

番外編 S T R O N G W O R L D 1－2（後書き）

ウザイヤツが居ると学校行きたくなくなりますよね

ついでに小説書く気も失せるし……そんなんでも更新が遅れたんですけど

恨むならRを恨んでください

逆にテンションガタ下がり作者にエールをくださいもしかしたら更新が早くなるかも知れませんΦ（・・）

番外編 **STRONG WORLD 1-3 (前書き)**

更新遅れてすみません

m (|) m

高校入学なんかでゴタゴタしてて：

正直ダルいし高校なんてマジ行きたくありません

(D、)

友達もはぐれちゃったし

(p | q) エーン

番外編 **STRONG WORLD** 1-3

一番大きく雪山がある島

そこは、薄暗く深々と雪が降り積もっていた

その島の城内の植物園のような所にナミは居た

植物園のような施設の中は、薄暗い外と違い明るくプールがあること
からとても暖かいのだろう

ナミはプールサイドに立ちプールに飛び込んだ

しばらく潜った後水面に浮上しクロールで泳ぎ始めた
泳いでいるときナミの視界に排水溝が映る

ナミはプールの端まで泳ぐとターンをして今度は背泳ぎ
そうやってしばらく泳ぐとプールサイドにある手すりを使って地面
に上がった

そして、ヤシの木と木の間に吊るされているハンモックの所に行き
ハンモックの上に置いてあるタオルを取った

すると、突然ダンスミュージックが鳴り響いた



♪♪♪

ナミが吃驚して振り向くと、そこには白い布が垂れ下がっておりそれに三つの黒い影が映っている

それを見たナミは顔をしかめた

♪♪♪

音楽の音調が変わると白い布が取り払われそいつ等の姿が露になった

一人は、かの有名なヤラレ役フ○ーザ様のボイスを持った白衣の男
青い髪に青いマフラーそしてピンクの縁のサングラス
年齢不詳のぽっこりお腹のこの男は、D r・インディゴ

もう一人？は、黄色地の帽子にピンクのジャケットを羽織ったゴリラ
スカーレット隊長

このゴリラは、元々メルヴィユに住んでいた珍獣で、島の珍獣達の
司令塔である

そして、金獅子海賊団 大親分 ？金獅子のシキ？
かつて、海賊王と渡り合った伝説の海賊
悪魔の実の一つ“フワフワの実”の能力者

2人と一匹は、踊り終わるとオー○リーの春○のような歩き方でナミに近づいて来る

♪♪♪♪♪

歩いて来る間にも、音楽は流れ続けており、歩くたびに振り付けをするので、正直見ているだけでウザイ
そして、ある一定距離まで来ると・・・

♪♪♪!!!!

と最後の音楽が鳴り終わると同時にキメポーズをした

「フン」

それを見たナミは、うざったそうに鼻を鳴らすと無視して髪をタオルで拭き始めた

ナミに無視されたシキは、不敵に笑うとナミに絡み始めた

「ハァーへへへエ 決心はついたかい？ ベイビーちゃん」

そう言いながらシキが近寄るとナミがイライラした口調を隠す事なく怒鳴った

「早くここからだして！」

「ジハハハッ！ 気の強え娘だ　そういう女は嫌いじゃねえ」

そんな事を言われてもシキはナミを適当にあしらう

それを後ろからニヤニヤしながら見ていたD r. インディゴは突然何かを思い出したのかブツブツブツと変な足音を立てながらシキに近づいていく

シキは足音と共に腰が曲がっていき耐え切れなくなったのか永遠のD r. インディゴに向かって叫ぶ

「テメエの足音はどうかなんねえのか！ D r. インディゴ！」

それを聞いたD r. インディゴは立ち止まりオーバーアクションの身振り手振りで何かを伝えようとした

「あん？ 何が言いてえんだ」

パラパラの振り付けをしていたD r. インディゴはいきなり動きを止め一拍置くと

「そう言えばお見せしたいモノが」と言った

その後に「しゃべるんかい！」とシキがツッコむ

その低レベルな漫才を見たスカーレット隊長は

「ホオッ ホッホッ」

と手を叩きながら大爆笑する

その仕草に何かを思い出したのかシキが顔に驚愕の色を浮かべ

「おっお母さん!？」

「ゴリラだろ!どう見ても!」

とさっきまでボケていたDr. インディゴがツッコむ

「「「ハイツ!!!」」」

そして、ここまで終わると三人は声を揃えてポーズを決めた

「こっち見ないで」

が、ナミはそれだけ言うと言を背を向けてハンモックのほうに向かった

「氷のようだぜ　ベイビーちゃん　ジハハハハハ…」

そんな態度でもシキは怒る所か余裕の表情だ

ナミはハンモックにタオルを戻すと側の木に手を置いた

(どうしてあの時・・・)

ナミは一週間前に思いをはせた

番外編 S T R O N G W O R L D 1－3（後書き）

誤字脱字などありましたら言ってください

ちよつと今やる気をなくしているので更新が遅くなるかも知れませんがよろしくお願いいたしますφ（．．）

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 1 (前書き)

すみません

更新遅れました

んゝ多分これから月一更新になりそうです
ご迷惑かけますが宜しくお願いします

番外編 STRONG WORLD 2-1

一週間前

麦わらの一味の船“サウザント・サニー号”は、穏やかな海を航海していた

その船の上では、新聞を見ながら討論が行われていた

「イーストブルーで：なんだって？」

ルフィが新聞を読んでいるナミに聞いた
ナミは新聞から目を離さずタイトルを読んだ

「『襲い掛かる脅威 突如消えゆく街の謎』 イーストブルーで一
夜にして次々と街が減びてゐるみたい」

そういいながらナミは新聞をルフィに渡す
それをウソップも覗きこんだ

「今のところ私たちに関係ある島は無事みたいだけど それもいつ

まで続くか・・・」

ナミの話をタバコを吸いながら聞いていたブルックにチョッパは新しく入って事情を知らないブルックに説明する

「ルフィとゾロとナミとウソップはイーストブルー出身なんだ」

「あ そうでしたか」

タバコの煙を吐き出しながら興味あるのか無いのか分からない声で言った

説明を終えたチョッパは何かを思い出したようにサンジの方を向いた

「あれ？サンジもだっけ？」

うつむきながらタバコを吸っていたサンジはイマイチテンションの上がない声で答えた。多分イーストブルーにいるかつての師“赫足のゼフ”や仲間の身を案じているのだろう

「んまあ 生まれはノースブルーだが育ちはイーストだ」

そういうとまたタバコを咥え直すサンジ

「おおっ　なんだコリャ隕石？」

ルフィと一緒に新聞を見ていたウソップは記事と写真を見て素っ頓狂な声を上げた

しかし、ルフィはいつもの能天気な性格からは考えられないくらい真剣な顔で記事を見ていた

そのとき、なにかが太陽の光を遮った

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一同声を揃えて上を見上げた

ビュオオオオオオ

そんな轟音を立てながら一味の頭の上を巨大な船が通り過ぎた

「なんだアリヤ!？」

飛んでいる巨大船を見上げるとウソップが叫んだ

「島が・・・」

「なんで飛んでんだあの島!」

ナミとルフィも思わず声を上げてしまう

ルフィは、真上を通り過ぎて行った島船を追い掛けて船の船首辺りまで行くと身を乗り出すようにして島船を見上げた

それに続きロビンとフランキーも甲板に上がった

フランキーは、何があってもいいように舵を持ち

ロビンは、その島船を良く観察して何かを見つけた

「帆があるわ」

「帆船か？アリヤ」

ロビンのその呟きにフランキーも島船を見つめたまま答える

そこに、遅れて甲板に上がったウソップが望遠鏡を持ってやって来た
ウソップは、フランキーの近くまで来ると望遠鏡を覗き込んだ
そして、帆のあたりを見ると赤と黄色と黒で彩られたドクロが目
映った

「ドクロだ！海賊船か？」

ウソップが言ったのを聞いてサンジが呆れたように言う

「空飛ぶ島船かよ・・・」

「あっ・・・この風」

皆が問答しているのを後ろで眺めていたナミが突然声を漏らした

何かに気付いたようだ

すぐにナミは、船首にいるルフィに向かって叫んだ

「この方向はマズいわ ルフィ！もうじきサイクロンが来る！」

「なにっ そうか じゃあアイツらにも教えてやろう」

ルフィはそう言うのと両手を広げてブンブン振りながら大声で叫び始めた

「おーい！そっちはサイクロンが来るぞオ！」

そんなルフィを見てウソップはサイクロンに怯えているのか島船に怯えているのか分からないが半分腰を抜かしていた

「オ、オイ…大丈夫かア？」

ルフィはウソップの心配をよそに叫び続けた

その様子をモニターで見ていたシキの部下はシキに報告した

「何か叫んでいるようですが」

「海賊か？」

「そのようで」

「おーい！」

なおも叫び続けていたルフィ

そのルフィに向かって島船から何かが飛んで来た

ピュイーン

「お？」

飛んで来たのは黄色とオレンジの色鮮やかな貝

貝は、ルフィの前まで来ると空中に留まりルフィが手を出すと手の中にすっぽり入った

「ど、どうしたルフィ」

ウソップは震えた声で尋ねるがルフィは聞いちゃいない
ルフィは「ナミ！」と叫ぶとナミに向かって貝を投げつけた

「え？ハッ あ…」

ナミは戸惑いながらもそれをキャッチした
ナミが貝を見つめているとウソップが駆け寄る

「トーンダイアルじゃねえか」

ウソップは貝を見てそう言った

トーンダイアルは前に空島に行った時に見た貝で貝の中に声を溜めておけるという代物だ

「ってことは空島にも行ったことあるってことか」

同じくトーンダイアルを見た事があるサンジがそう呟く

「いよいよただモンじゃなさそうだな」

ゾロもそう口を揃える

「誰だっていいさ」

船首から戻って来たルフィは本当にどうでもよさそうに言った
しかし、その後持ったまま立っているナミに声を掛けた

「ナミ！」

「ええ！」

ナミはルフィが何を伝えたいのか分かったようです。すぐにトーンダイアルに声を録音しトーンダイアルを空へ投げつけた。

投げられたトーンダイアルは、落ちずにそのまま島船へと飛んでいった。

「ほう 使い方を知っていたか」

戻って来たトーンダイアルを見てシキはニヤリと笑った。
シキはトーンダイアルを片手で掴むと親指で貝の先端を押すと録音されたナミの声が再生された。

「すぐにサイクロンが来る 進行方向より9時に逸れて！」

シキはそれを聞くと白衣を着た男達に目を向けた。

「航海士チーム」

シキにそう言われた男達は汗を浮かべながら答える

「いえいえ そのような兆候はまったくありません」

「水銀計も正常値です」

と他の航海士も付け加える

そう答えたところでモニターを監視していた男が左に逸れていくサニー号を見てシキに報告した

「やつら9時の方向に逸れました。すごい脚です！」

そう報告を受けたシキが前方を見ると晴れ渡っていた空に黒い雲がだんだん広がっていた

「お？ パーマ？」

それを見たシキが素っ頓狂な声を上げた

「雨雲だろどう見ても！」

とDr. インディゴがシキの後頭部を叩いてつつこむ

シキたちが漫才をしている間部下や研究員達は慌てていた

「ウソだろ？」

道具や書類を持って走り回っている研究員の中の1人が叫んだ

「シキ様！すぐ9時の方角へ舵を！ばかデカイサイクロンです！」

部下の叫びでようやく事の重大さが分かったのか目を見開いて言葉を失っていた

「クッ！」

正氣に戻ったシキはすぐに進行方向から9時に船を逸らせた

しかし、ナミの忠告聞いてから遅れてしまったためすぐにサイクロンの雨雲に飲まれてしまった

帆やマストが風でミシツと音を立てて軋み

シキの居る中央の楼閣部分にも風が侵入して書類を撒き散らした

「ふぬっ！」

シキは風の侵入を防ぐため能力を使い扉を閉めた

しかし、楼閣の外にはまだ多少の部下が残っていて彼らはサイクロンの中に放り出されてしまった

「シキ様！お開け下さい シキ様！！」

必死に扉を叩いて懇願する部下たちだったが無情にも扉は開かない

「うわぁ！」

そのうち、強い突風が来て部下達は皆吹き飛ばされた

船がサイクロンを抜けたところで楼閣の中では、二本の煙が立ち昇っていた

一本はシキの葉巻の煙

そしてもう一本は、シキの持つ拳銃から上がっていて撃たれたのはナミの忠告を問題無しと言った研究員

「ウウツ　ウウウツ…」

その不運な研究員は、最期に呻き声を出して倒れた

シキは予報を外した見せしめだと言わんばかりに周りに殺気を放った

「二度と予報は外すな・・・」

「ハ、ハイ！」

惨劇を見せられた他の研究員たちはそれしか言えなかった

「にしても・・・選りすぐりのコイツらを凌ぐ気象センスを持つ女とは」

そう呟いたシキの目はモニターに映っているサニー号に向けられていた

「もう嫌だああああああ」

シキとルフィたちが抜けたサイクロンの中に少年が1人空中走っている・・・ように見えた

走っているのは黒い着物を着たエンマ

もちろん空を走っているのではなく空間を物質化させその上を走っているだけである

何故こんなことになったのかと言うと

エンマは、映画STRONG WORLDに出演（原作介入）するべくブルックがいることからスリラーパークが終わったあたりから皆が散り散りにされるシャボンディ諸島までと検討をつけてストーキングしていたら自分までサイクロンに巻き込まれてしまったパターンだ

シキの船が出た時点である程度警戒していたのだが、原作キャラたちに見つからないように上空に居たからルフィたちがギリギリ点に見えるくらいでトーンダイアルなんか見えやしない

そして、サニー号が左に曲がって行っただのを見てエンマもすぐに転移でサイクロンの範囲外まで逃げようとしたのだが、いかんせん上空の方が風が強い

雨雲が到着するのも早いつてことで気付いた時には雨雲が目の前に迫っていた

「・・・あつるえ？」

まあ・・・吹き飛ばされてしまったわけだ

しかし、辛うじて空中に足場を確保

そこから転移しようと思ったが転移出来る範囲が分かっているのは

自分の行ったことがある場所と自分が見えている範囲までだ

まず、行ったことがある場所・・・却下

サイクロンは回避出来るし、また来れるしいと思うだろう・・・
しかし！自慢じゃないがメルヴィユの場所なんか知らん

サイクロンが収まってから戻って来たとしても多分ルフィたちはシ
キとメルヴィユに旅立った後だろう：てか100パーセントそう

見渡せる範囲までの転移・・・ムリ

雨雲のせいで視界最悪

見えて4～5メートルくらい

万策尽きた・・・

「畜生おおおおおおお！！！」

そう叫ぶとルフィたちが逃げて行ったであろう方向に向かってダッ
シュした

もちろん、足場を作っては消し環境への配慮も忘れない

しかし、エンマの頭の中は環境のことなど微塵も考えちゃいない
普段やってるから慣れてしまっただけで、頭の中はどす黒い感情が
渦巻いていた

（なんで、ナミは俺に教えてくんなかったの！？何？あの竹中爺さ
んの方が大切な訳！？しかも神、こんなところに送るならチートな
能力の一つや二つよこせや！皆、俺にそんなに死んで欲しいの！？）

被害妄想でだんだん狂っていくエンマ

狂っているの、見つからないようにしてた自分が悪いことに気付いてない

何も知らないナミに八つ当たり

しかもテンプレと違って神に間違っただけで殺されたパターンない上会った事すらないのにチートな能力を要求する始末

そんなエンマに神様もイラっときたのかエンマの周りに更に風が吹き荒れ豪雨が身体を叩きつける

エンマの長い髪がボサボサになり全身びしょ濡れになった

何か切れちゃいけないものがプツンしてしまったエンマ

「どいつもこいつも・・・上等じゃねえか・・・ブツ殺してやるよ！」

手当たり次第空間を破壊したり吹き飛ばしたりしてぐちゃぐちゃにしていくまさにカオス・・・

仕舞いには空間を重力で圧縮しミニブラックホールまで造ってしまう

空間を破壊され一部を丸ごと吹き飛ばされたサイクロンは、纏めてミニブラックホールに吸い込まれた

「粉碎・玉砕・大喝采！フハハハハ！」

エンマは憎きサイクロンをぶっ潰したことで気付いていなかった

ブラックホールの脅威に・・・

サイクロンを吸い込んだ後も勢いは止まらず大気や海、エンマまでも吸い込み始めた

「フハハハ・・・あれ？」

だんだんと吸い寄せられていることに気付いたのか笑が止まるエンマ

「ぎゃあああああああ!!!!」

周りに何も無くなった海にその声だけが響いた

番外編 STRONG WORLD 2-1 (後書き)

やっと地味にエンマ出てきました

自分で読み返しましたが面白くありません

まあ仕方無いですね作者バカなんで

誤字・脱字等ありましたら言ってください
アドバースなんかもあったら言ってください

※この作品は、作者の出来心でつくられています
誹謗中傷はやめてください

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 2 (前書き)

今回短いです

作者が面倒臭いのもう短いのを早めに更新していくことにしました
長いのだと書いていくうちにヤル気が無くなってしまうので・・・

番外編 STRONG WORLD 2-2

エンマがブラックホールに飲み込まれている頃
シキとルフィたちは丁度サイクロンを抜け安全圏に到着したところ
だった

安全圏に來るとシキはトーンダイアルの声の主を探すためサニー号
に舞い降りた

――キンツ

「い、今どうやって降りてきたんだ!？」

「さ…さあ・・・」

目の前で起こったことが信じられないというように固まるルフィと
ウソップ

シキは満足そうにその姿を見ると腕組みをして言い放った

「俺は金獅子のシキ 海賊だ!」

そう言った後キョロキョロと船の上を見渡した

「で、トーンダイアルの声の主は？」

「あたし…だけど」

ナミがオズオズと手を上げた

シキはナミをまじまじと見る

「ほう…ベイビーちゃんが…礼を言う」

「あ…いえ」

そんな会話が繰り返されていると空気の読めないルフィが口を開いた

「なあ オッサン なんでアレ浮いてんだ？」

ルフィはそう言って空に浮かんでいる島船を指す

「ん？ああアレか フワフワの実の能力だ 俺は触れたモノを重力に関係無く自在にコントロールできる」

そう言うのと近くにあったゾロのダンベルに触れた

「よいしょっと 見てろ」

シキは手を前に出すと指を出し手に平を返すと指を上に向けた

するとシキの指に従うようにダンベルは宙に浮いた

「うほっ うわっ」

ルフィは驚いたのか奇声を上げている

ダンベルは20メートルくらい上がるとシキが能力を解いたのか凄
い速度で落下して来た
勢い良く落下して来たそれはゾロの頭上に落ちるが、ゾロは片手で
らくらくキャッチした

「「「オオッ!!」」」

ルフィ、ウソップ、チョッパーの三人は目を輝かせる

「スッゲー! オッサン 俺もフワフワしてくれ」
テンションの上だったルフィが騒ぎ出す

「俺も俺も!」
チョッパーもそれに乗って騒ぐ

シキは、二人を横目で見ると笑い出した

「ジハハハハ! 残念 俺以外の人間や動物 生きてるモンは浮かせ

られねえ」

それを聞いたルフィは急にしらけた顔した

「なんだア つまんねえ」

「「ブーブー」」

ウソップとチョッパーもシキに向かってブーイングした

しかし、シキは大人の余裕で聞き流すとマストにもたれ掛かりながら座り話をきり出した

「ところで、お前達を俺のアジトでもてなしたい。ほんの礼の印だから来てくれるな？」

「いや いいよ」

突然のルフィの言葉に全員が振り向く

「フッ？」

まさか断られるとは思っていなかったのか、シキが間拔けな声をだす

ルフィはそれまで首に提げていた麦わら帽子を被るとこう言った

「俺達これからイーストブルーに行かなくちゃいけねえんだ」

「「「「「ええ!？」」「」「」「」」

それに驚いたのはシキではなくウソップたち麦わらの一味だ

(ピーッ!!!!)

ウソップが何処からか取り出した笛を吹く

「おまつ、おんまつ冒険はどうすんだよ!」

噛みまくりながら必死で訴えるウソップにたいしてルフィはあっけらかんとしている

「そんなモンいくらでもやり直しやすい 故郷のヤツらのピンチにお前はじつとしてられんのか?」

「えっと…それは…」

ルフィの問い掛けに口ごもるウソップ
多分、故郷を心配する気持ちとここまで来たのにという思いが交錯しているのだろう

「決まりだな」

今まで、その様子を見ているだけだったサンジがポツリと言う

「そ、そうか…そうだな」

ウソップもその言葉で腹を括ったようだ

「そういうワケだからよ 礼はいいよ」

ルフィの言葉を聴いたシキは肩をワナワナ震わせてこう言った

「ますます気に入った！そうか、イーストブルーはお前達の故郷かそれはさぞかし心配だろう：よし分かった俺の能力で連れて行ってやる！」

「ほ ホントか！？ありがとうオッサン！いいヤツだな」

ルフィは飛び跳ねて喜ぶ

「当然だ」

黒い笑みを浮かべながらシキはそう言った

喜ぶ一味だったが、ゾロだけは険しい顔をしている

ゾロは基本バカだが、勘は鋭い。何かを感じているのだろう

そんな事を尻目にルフィは勢いよく叫ぶ

「よし 野郎ども戦闘準備だ！」

「「オッッ！」」

「気が早いっての！」

三人だけで、盛り上がっているルフィ、ウソップ、チョッパーの三バカにナミは突っ込んだ

ズオオオオオオオ

シキの能力により船は空へと漕ぎ出した

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 2 (後書き)

あとがきが思いつきません

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 3 (前書き)

今回も短いです

番外編 STRONG WORLD 2-3

「ウホホホホッ！高え」

今、ルフィ達麦わらの一味はシキの能力でシキの島船と共に空の旅を楽しんでいた

「気持ちいいなあ」

ルフィ、ウソップ、チョッパーの三バカは各々自称“戦闘服”に着替えてから縁をつかんで景色を眺めていた

それは、普通なのだが、その自称“戦闘服”が少しおかしい戦闘服と言うにはあまりにも無防備かつお粗末だ

ルフィは、いつものノースリーブではなく半袖のシャツに麦わら帽子の下にゴーグル付きの飛行帽を被っているだけ
しかも襷をクロスさせたように大量の荷物をぶら提げている。完全に戦闘には向かないと思う

次にチョッパーは、Dr. ヒルルクから貰ったピンクの帽子の上から黄色い帽子を被っている

いつも裸の上半身は、今回タンクトップを着ている。若干防御力が上がった気がしないでもない

最後にウソップ。こいつが一番奇妙な格好をしている
まず、上半身は紫のタンクトップに首には黄色いスカーフ
そして、頭にはオレンジのヘルメットに潜水用と思われるゴーグル。
頭だけ防御力が異常に高い

はたして、コイツらは一体どこに行くつもりなのだろうか？甚だ疑問である

「アンタたち 戦闘準備のイメージズレてない？」

三バカを見て冷たい目でツツコむナミ

「まったく：もう少し緊張感を持っていたきたいなあ」
それに、便乗してブルックはやれやれという風に溜息を吐く
だが、当人の格好も大概だ。デカイサングラスにヒラヒラの付いた
オレンジの長袖シャツに黒地に花柄のベスト
更には片や黒と橙のストライプ、片や白無地の左右非対称のズボン
ぱっと見完全にイっちゃてる人だ

「アンタがずば抜けてユルいわ！」
とナミがツツコむ

「何かみえてきたぞ」

そんな事を微塵も気にしていなかったチョッパーは前方に何かを見

つけて指差した

皆一斉に前方を向く

そこには、島が幾つか水ごと浮かんでいた

水面がキラキラと太陽に反射してとても幻想的だ

その水にあいまってところどころに虹が架かっている

船はどんどん島の群れに近づいて行き

一番大きな中央の島に向かいながら島々の間を潜り抜けて行く

「スッゲーな コリヤ」

「これもみんなオッサンの能力で浮いてんのか？」

「ああそうだ 一旦浮かせたモノはそのまま浮き続ける」

序盤から既に聞いてないルフィは何かを見つけて騒ぎ出す

「うおっ あの島でええ！」

それに釣られてウソップもそっちの方を見る

ルフィが騒いでいたのは雪山のある一番大きな島だった

シキは島を見るとニヤリとして葉巻を咥えた

「着いたか さて…」

それだけ言うとナミに近づいていく

そしていきなり両手を空へ掲げると叫んだ

「ここはメルヴィユ！冒険好きのお前らにはうってつけの島だ！存分に遊んでくるがいい！」

「キャアッ」

シキはそう叫んだ後ナミを掴んだ

「おい！」

ルフィたちがシキに駆け寄ろうとした瞬間

「どっこいしょ！」

シキが手を下に下げた

ビュウウウウン！！！！

それと同時に船はひっくり返りルフィたちは空中に投げ出される

「うわああああああ！」

「航海士はもらったア！」

シキはナミを抱えながら高らかにそう叫んだ

「ナミー！」

ルフィは落下しながら腕を伸ばしてナミを奪い返そうとする

「ジッハハハハハ！」

シキは、それを嘲笑いながら指を回した

するとルフィたちと一緒に落下していたサニー号がいきなり回転し皆マストに衝突し幾つかに分かれて吹き飛ばされた

「わは」

「がぼ」

「どごっ」

「どおあ」

「うわあ」

「うほお」

「きゃ」

「だあ」

なんとも個性的な効果音を叫びながら吹き飛んでいくルフィたち

「ルフィー！みんなーっ！」

「ジハハハハハハ！ジーツハハハハハ…」

島々にはシキの笑い声だけが木霊していた

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 3 (後書き)

短くてスイマセンね

感想・誤字、脱字・アドバイスなんかあれば言ってください

後、最近ゲキカラこと松井玲奈ちゃんにハマッてしまいました
めっちゃかわいいです

二日連続更新正直キツイです

番外編 S T R O N G W O R L D 2 ー 4 (前書き)

テストが明日で終わりです

なので、また投稿ペースが落ちます

この程度の字数でよければ3日に一回くらいで投稿出来ますけど
どちらがいいんでしょうかね？

ナミが回想を終えると、さっきまでどこかに行っていたDr. イン
ディゴが戻って来た

「シキ様！新しい進化の形が出現しました！」

戻って来たインディゴは、大きな檻を抱えていた
その檻に入っていたのは赤いトサカを持った黄色い鳥

「ご覧下さい」

インディゴは、シキの前に来ると籠を降ろした

「え？ギター？」

「鳥だろどう見ても！」

どうやら陀輪が食い込んでいたため目が腐ったのか
鳥がギターに見えたようだ

「」「ウホッ ハイ！」「」

そして、決まった！とでも言いたいのか

大して面白くないのにドヤ顔で決めポーズする馬鹿共

「クアーツ」

あまりにつまらなかったのか鳥は檻から飛び出しシキたちに放電した

ビビビビビビビビ！！！！

黒こげになった三人シキ以外の2人は完全に焼け焦げて地に伏していた

「コンチキショウが！」

キレたシキは鳥の頭を掴み地面へ叩き付けた

「ちょっと！」

その様子を見たナミは鳥に近づく

「進化って今のか？」

シキは鳥を忌々しげに見つめながら炭になっているインディゴに訊く

「はい 電撃技が特化したタイプでして…」

その会話を聞いてナミは不審そうな顔をした

「何よ 進化って」

「ん？ そうか 仲間になってくれと頼んでるんだからな 教えてやろう」

ナミの質問にニヤニヤしながら答えるシキ
更にこう続ける

「この島にはもともと見た事もねえ進化を遂げた動物たちがウヨウヨ住みついてたんだ。その原因はIQという植物
こいつは、動物たちの脳に作用し状況に応じた進化を促す。それを知った俺は島中のIQを全て牛耳った」

さっきまで炭だった起き上がりDr. インディゴが補足する

「この島に住みつき20年 ついに我々はIQから新たな薬を開発したのだ！ その名も『SIQ』」

そう言って懐からなにやら奇妙な液体を取り出した

「これを動物たちに撃ち込むと戦闘的な進化を遂げる！連続投与すればさらに凶暴性を増すこともできる この島にはそうして凶暴化した動物がウジャウジャいるのだ」

「ひどいことを…なんのためにそんな！」

ナミが嫌悪感を露にして叫ぶ

しかし、シキは何処吹く風

「俺の目的はいずれ分かるさ 仲間になればな」

「だから！そんな事絶対…「なる！」」

ナミの言葉を遮り断言するシキ

「オメエはどうしたって自分から俺の仲間になりてえと懇願するようになるんだ もう少しオメエの気持ちたちが落ち着いたら全てを話してやるさ」

シキは一旦ここで切って嫌に間を持たせてこう言った

「仲間なら聞いてやれる頼みつてもものがあるだろ？ ジツハハハハハ」

「ウホッ！」

ここで空気の読めないクソゴリラが何かを言った

「え？この女を俺にくれって？」

「ウホ」

「話ハズれすぎだよ　このエロゴリラ！」

「驚いた！おばあちゃんかと思った」

何故かさつきまでシリアスムードだったシキも加わる

「どんだけゴリラ顔だよ テメエの血統は！」

「ハイっ！」

ナミは、もう付き合つていられないとでもいうようにガラス張りの壁に近寄り外を眺める

「（アイツらがまだ来ないのはその動物たちのせいってワケね）」

ナミは一度溜息を吐くとゆっくりと目を閉じた

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 4 (後書き)

グダグダ炸裂しました

自分の文章力の無さが恨めしいです

一つ質問です

時間をかけて修正をしたものを一ヶ月に一回投稿するのと、今みたいに短いのを連続投稿するのどちらがいいと思いますか？

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 5 (前書き)

まず、すいません m () m
更新を早くする予定でしたが三者面談など所用で遅れました

番外編 STRONG WORLD 2-5

そのころサンジとウソップはトラマタとカウボールと戦闘中

ゾロとチョッパー途中出会ったマンモスデンスという足がたくさんあるマンモスのクリーチャーの上に乗りゾロの奇跡的な方向音痴により何日も雪山を彷徨っていた

しばらく進んでいると前方にトナカイのような角を持った恐竜に腕に羽のようなものが生えた少女が襲われかけていた

少女は気絶しているのか逃げる様子がない

「チッ」

ゾロは舌打ちすると恐竜の元に駆けていき恐竜を斬った
恐竜はそのまま倒れて動かなくなった

ゾロが刀を納めているとチョッパーとマンモスデンスが追いついてきた

「よかった間に合った」

チョッパーは近くまで来るとマンモスデンスの背中から飛び降りた

ゾロは少女を抱きかかえるとチョッパーに差し出し：

「チョッパ―お前の毛皮貸してやれ」

「そうだな 寒そうだ」

チョッパ―は急いで毛皮を脱ごうとするが…

「って脱げるかつ！」

そんな感じでひと悶着あり、今は少女を乗せてまた雪道を彷徨っている

(ドスン ドスン ドスン)

その後もゾロの指示により進み続けるが一向に雪道から抜けられないもう何日も彷徨っているので慣れたと言えば慣れたが暇な事には変わりない

「あ…あ？」

しばらくするとゾロの腕の中で少女が起きた

「気付いたか」

ゾロが声を掛けるとビクツとなる

起きたらいきなり話しかけられたのでびっくりしたのだろう
そして、キョロキョロと辺りを見回す

「あ あれ？」

少女は今の状況をイマイチ理解出来ていないようだ

「お前こんなところで何してたんだ？」

チョッパーは心配したのか優しく話しかける

「あ？ えっと それは…」

話したくないのか花を握りしめて口ごもる少女

「まあいい とにかく早くここを抜けよう。もう何日も雪の中でうんざりしてんだ」

ゾロはそれを察したのか話題を変える

ゾロは基本バカだが勘は鋭い。一応ルフィと違い空気も読める方だ
しかし、少女はゾロの言葉を聞いて不思議なものでも見るようにゾロを見つめる

「冬ゾーンは半日もあれば抜けられるはずだよ」

「「えっ!？」」

絶句する2人

訂正。ゾロはただのバカ、もとい方向音痴だった

「あっちだよ」

少女の言う通りに進んで行くと…

「ほら！」

ありました。逆に目が痛くなるくらい黄緑一色の植物に囲まれた村
一体ゾロとチョッパーの冬ゾーンの旅は何だったんだと思わせるく
らい近かった

チョッパーもそう思っているのかジト目でゾロを見る

「今までずっとゾロの言うとおりに進んできたよな…」

「た、たまたまだ」

そう言いながらも固まっているゾロ

いい加減方向音痴を自覚した方が良いと思う

固まっているゾロとチョッパーをよそに少女は満面の笑みで雪山か
ら続いている川を指差す

「あの川を辿っていくとわたしの村だよ」

マンモスデンスに揺られながら少女はおもむろに自己紹介を始める

「助けてくれてありがとう 私シャオ」

少女もといシャオが名乗ったのでゾロたちも名乗る

「ゾロだ」

「俺はトニートニー・チョッパーだ」

チョッパーが名乗った瞬間シャオが青ざめる

「あつ　ゴ、ゴリラが喋った…」

そしてまた気絶するシャオ

この子は自分の処理範囲外の事が起こると気絶するようだ

「気絶すんなーッ！」

チョッパーの悲しい叫びだけが雪山に響き渡った

番外編 S T R O N G W O R L D 2 - 5 (後書き)

やっと夏休み突入しました

いやゝバイト始めようと思ったんですけど

高校の許可証が要るところばっかりで困りますね

後自分でも思っんですけどコレ面白くないですよね…

番外編 S T R O N G W O R L D 2 1 6 (前書き)

やっとエンマ出てきました
なんか雑魚臭がしますね

一週間前サイクロンに巻き込まれたかなりのダメージを負ったエンマは、ルフィとシキたちが去った方向へ何度も何度も転移を繰り返して二日をかけてやっとメルヴィユの一番手前の島に到着していた

「ふう…やつと出番か…久しいな」

訳の分からない事を言い出したがそこは寛大な心でスルーしてもらえるとありがたい

エンマはもっと奥の島で暴れているであろうバカ共を発見するためまずこの島を攻略しようと考えた

何故なら動物たちがどの程度強いのか分からないからとこの島の動物たちを出来たら配下に治めようという計画である

動物たちは今現在エロゴリラ大佐の支配下なのでエロゴリラ無力化対策はしておかなくてはならない

まあ中央の島へ行けるのは飛べる奴らだけだろうが…

しかし、配下に治めておけばいざという時に役に立つかもしれないオレだったら動物など生き物（死体は除外）は転移出来ないが島ごとと転移させることは出来るので大きな戦力になるだろう

「よっしゃ！出発だ！…って1人でやっても虚しいな…基本オレみたいな奴には原作キャラのパートナーとかオリキャラの相棒とかいるんだけどな…何処で道を間違えたのやら…」

ブツブツ呟きながら島の森の奥へと進んで行く

しばらく進んで行くとルフィとクマ公が戦った広場みたいなところがありそこにアニメで出て来たカエンカブトとミヤマ・エンペラーというクワガタのクリーチャーが戦っていた

今のところミヤマ・エンペラーがカエンカブトを銕んでいてミヤマ・エンペラーが優勢だ

ミヤマ・エンペラーはそのまま切断しようと更に強く銕む
カエンカブトの身体はギチギチッと嫌な音を上げている

しかし、カエンカブトもやられっぱなしじゃいられないのか口から火を吐いた

その火は見事ミヤマ・エンペラーの背中に着火した
ミヤマ・エンペラーは火を消そうと転げ回る

何ともシュールな光景だ…

カエンカブトは転げ回っているミヤマ・エンペラーを持ち上げそのまま銅像に叩きつけた

銅像は瓦礫に変わりミヤマ・エンペラーはその上で煙を上げながら倒れていた

『ギシイイイイイイ！！！』

カエンカブトは勝利の雄叫びを上げた

「・・・虫きめえ」

虫が大嫌いなエンマたとえそれがカブト虫だろうがクワガタだろうが関係無い

更に言うとうと元々日本にはいなかった人間が死んでも生き残るであろうと言われている通称“黒い悪魔”エンマはアレを見ただけでも吐き気をもよおす

なのであんまり奴らを視界に入れて置きたくないエンマは【月蝕】を取り出し奴ら二匹に向かって斬撃を放つ

全力で放ったそれはたやすく二匹を吹き飛ばした
二匹は仲良く森へ消えて行ったとき
めでたしめでたし

で、済む筈も無く吹き飛ばした森の方から何やら図体のデカイ豚ライオンもどきファットライオンが出て来た
ファットライオンの頭にはこれまたデカいたんこぶが多分、あの蛆虫どもがぶつかったんだろう

可哀想にあんなキモイのが頭にあたるとか…ご愁傷さまです

だがナイスだ！コイツを配下一号にしよう

まあ豚獅子というのはあれだが蛆虫どもよりは幾分かマシだ

という訳でエンマによるファットライオンの説得が開始された

「やあ豚獅子くん！ここであなたに会えたのも何かの運命だ！一緒に捜査しませんか？僕が推薦します！」

某新世界の神が偽名を使った生意気な女から本名を聞きだした時の
台詞を言った

エンマがどや顔で手を差し出すと…

「うぶっ」

ファットライオンの前足によって吹き飛ばされた

ファットライオンにとってはペシッと払ったぐらいだろうがエンマ
には大ダメージである

エンマはゆっくり起き上がると豚獅子をにらみつけた

「うう…裏切ったのか…松田ア！」

別に裏切った訳ではないと思うが

こっちに来てから色々あってストレスが溜まりまくっているらしい
ので勘弁してあげてほしい

エンマは自我もとい精神力を元に【月蝕】を発動する

エンマの瞳はワインレッドに変わり同色のオーラが身体から迸る

前は扱えなかった【月蝕】の能力、しかもコイツに自我を与えるこ
とで覇王色の覇気を使えるようになる

オレは覇王色では無かったが武装色と見聞色は使えるようにはなった

まあまだまだ能力無しでは白ひげの隊長どころか海軍の少将すら危
ないが…

だがここは幸か不幸か無人島
居るのはこのバカな怪物どもだけだ

「行くぞコラアアアアア!!」

エンマは自分の後ろの空間を弾いて自分を飛ばした

エンマはファットライオンの目の前まで来ると顔面を思い切り蹴り飛ばした

しかし、武装色の覇気は使っていない

そこは腐っても図体だけはデカイファットライオンに軍配が上がる

ファットライオン・・・もういいや豚獅子は攻撃を受けきるとまた前足を使ってエンマをはたく

多分エンマをうるさいハエぐらいにしか思っていないだろう

「プギャー W W W W W W W W」

エンマは殴られたというのにニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべている

そのまま飛ばされ森に墜落した

「ガアアアアアアアア!!」

豚獅子は勝利を確信したのか雄叫びを上げる

「あははっ！残念だがそれは生存フラグだ」

突如森から聞こえた声

それと同時に豚獅子の立っている地面が消失した

消失した地面は落とし穴のようで豚獅子じゃどうあがいても脱出は出来そうに無い

だが、それでも何とかしようともがいて上にある出口に向かう

しかし、その出口の穴から見下ろしている人物がいた
それはファットライオンを見下ろしながら嘲笑していた

「ハハハ！バーカ、バーカ！雑魚の癖に調子に乗るからだ！」

「ガアアアアア」

豚獅子はバカにされたのが分かったのかエンマに向かって威嚇する
だがエンマは嘲笑を止めない

「あれあれ？いいのか豚公ごときがオレに
歯向かつちゃって」

エンマが指をパチンと鳴らすと空中に無くなった地面が浮かんだ

「……」

豚獅子は浮かんだ地面を凝視して硬直する

「おい豚公！黙るなよ 面白く無いだろ」

エンマはそう言うと言った地面の一部を切り裂いた
切り裂かれた地面はエンマの能力を解除され豚獅子に向かって落下する

「ギャウン！」

腹に当たり苦しそうな声をだす豚獅子
エンマはそれを見て更にニヤニヤする

「おいおい豚公！オレは二発も喰らったんだぞ！だからもう一発な
！」

めっちゃめっちゃ爽やかな笑顔を決めるエンマ
言っていることは心の狭い小者の台詞だが

エンマは浮かんだ地面を適当に切り刻むと能力を解除した

豚獅子に砂や石や岩の雨が降り注いだ

豚獅子の身体は顔面を残して埋まってしまった

エンマは7割くらい埋まった穴に飛び込み豚獅子の顔面に近づく
もちろん顔には本人に言わせれば紳士的

他人に言わせれば気持ちの悪い笑みを浮かべて豚獅子に話掛ける

「なあ豚公よ…一緒にフリーザ様もといバイキンマンと某フリータ
ーの親父を倒しに行かないか」

「ガアヴァ！」

「ちなみに豚公よ断った場合お前を食うから」

「・・・ガア…」

こうして紳士的な話し合いにより交渉は成功した

何故豚獅子と話せたかは触れないでほしい 勘だから

こんな感じでエンマは島の動物たちを配下に治めていった
まあ虫どもは豚獅子に間接的に従わせた

こうしてエンマの計画は着々とすすんでゆく

番外編 S T R O N G W O R L D 2 ー 6 (後書き)

まあ・・・亀更新ですね

言いづらいですけど今度チャンネルにSCANDALが来るので更に
亀更新になると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1086p/>

ONE PIECE Change the World

2011年8月31日01時40分発行